

命令・勧誘表現の四段型体系

川上徳明

はじめに

命令・勧誘表現についての考察は従来あまり多くはない。むしろ、少ないと言うべきであろう。特に、管見に限り中古の物語、日記等いわゆる仮名文を対象として、それを体系的に考察したものはないようである。注釈書・文法書等で、個々の例について、非体系的・断片的に説明されている——従ってそれは、時に不十分であるか、あるいは妥当を欠く説明になっている——だけのように思われる。

ここでは右の仮名文学作品（和文）における命令・勧誘表現について、次の二点を中心に考察する。

- 一 命令・勧誘表現には体系があるか、即ちそれを一定の原理で統一的に説明し得るか、否か。
- 二 また体系があるとすれば、その体系を形成する各表現形式はいかなる表現価値をもつか。

なお、右「二」の「表現価値」につき一言すれば、これは表現の客観的な意味内容ではなく、そこに込められた話し手の心情や意図といった主体的・主情的なもの他、その表現のもつ調子・語感・雰囲気などといったものを広く含めたものの謂である。

また、命令・勧誘表現の定義、用例採否の基準、考察の対象及び資料テキストについては、すべて「命令・勧誘表現研究のために」^{*1}による。また、例文の出典については、例えば『竹取物語』は竹取、『紫式部日記』は紫式部のように略記する。

—

—
1

命令・勧誘表現の基本的な形式が、述語文末の動詞・助動詞及び補助動詞の命令形によるものであることはいうまでもない。

先ず、動詞の例をみる。

- (1) (天人) 御衣をとり出でて着せんとす。その時に、かぐや姫「しばし待て」と言ふ。(竹取。かぐや姫↓天人)
- (2) ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。(伊勢、九。ある人↓をとこ)

(3) 中納言いそのかみのまろたりの、家につかはる、男どものもとに、「燕の巢くひたらば、告げよ」とのたまふを、(竹取。中納言↓男ども)

(4) 「なほ、こゝにあれ。来てみむにも心やすかるべく」との給ふ。(源氏、真木柱。鬚黒↓小きむだち)

(5) 「さてはいとよく言ひつべかなり。渡らん日をたしかに案内して来」とのたまへば、(落窪、卷三。道頼↓衛門)

(6) 「さらば、あさて、夜うちふかしておはせ」と言ひ置き給ひて出でたまひぬ。(落窪、卷二。道頼↓兵部の少)

(7) 「人に見えでをまかれ。をこなり」との給ふ。(源氏、浮舟。薰↓隨身)

これらは動詞の命令形による直接的、直線的な命令表現である。次に完了の助動詞の例をみる。

(8) 「われ物握りたり。いまは下してよ。翁しえたり」との給ふ。(竹取。中納言↓男ども)

(9) 「いとよかなり。たゞいまおひもて行きて、この北の部屋にこめてよ。ものなくれそ。しをり殺してよ」と、

老いほけて、もののおぼえぬまゝにのたまへば、(落窪、卷一。中納言↓北の方)

(10) (男) それ(取次)して「築地を越えてなむ、参り来つる」と言はせけるを、親、気色みて、いみじく騒ぎの、しりければ、(女)「さらに、対面すべくもあらず。はや、帰りね」とぞ言ひ出したりければ。(女)「行く先は、ともかくもあれ、つゆにてもあはれと思はる、ものならば、今宵帰りね」と、せちに言ひ出したりける。

(平中物語、二四。女↓男)

(11) (宮)「いざたまへ、今宵ばかり。人も見ぬ所あり。心のどかにものなども聞こえん」とて車をさし寄せて、ただ乗せに寄せ給へば、われにもあらで乗りぬ。人もこそ聞けと思ふ思ふ行けば、いたう夜ふけにければ、知

る人もなし。やをら人もなき廊にさし寄せて、おりさせ給ひぬ。月もいと明かければ、「おりね」としひてのたまへば、あさましきやうにておりぬ。(和泉式部。帥宮↓和泉式部)

右の諸例は完了の助動詞「つ・ぬ」の命令形によるものである。

完了の助動詞は、単に事件の完了を客観的に述べるだけでなく、表現に主観的な感情の色づけを加えるものである。^{*2}

とされるが、完了の助動詞、特にその命令形による表現は、命令法として、話し手の意図を相手にもちかけ、その実現を命令希求する、とりわけ主体的な情意の色あいの濃いものである。即ちこれは相手に向かってひたすらその遂行・実現を求めるものであり、意味的にも、心情的にも相手に対する働き掛けの度合の最も強いものである。

例えば、例文(9)は北の方の讒を真に受けた夫の中納言の言で、それぞれ「確かに閉じ込めてしまえ」「きつく折檻して殺してしまえ」といったところであろう。老中納言の事の道理もわからぬ——もののおぼえぬ——ままの言であるが、「こめよ」「しをり殺せ」と比べてみれば、これがより深い感情を込めた、強い物言いであることが知られよう。

例文(10)は「はや、帰りね」「今宵帰りね」と繰り返し男に帰ることを求める。親が感づいてあまりにも騒ぎ立てたからである。ともに女の懸命の要請であり、特に後者は詳しく事情を訴えた上で「今宵帰りねとせ、ちに言ひ出した」ものである。「ね」に込められた情意の強さをみる。

例文(11)は、帥宮が和泉式部に車をおりよと言うのであるが、無敬語で、しかも「しひてのたまへば」とあり、いわば無理強いである。短い一句だけに、甚だ厳しい口調になっている。なお、この部分「月もいと明かければ」が

地の文か否かが問題になるが、一往「全集」や「大系」の解に従っておく（因みに「大系」の「補注」には、これについて詳細な吟味がある）。

なお、「つ・ぬ」の詳細について既に詳述しているので、それを参照して戴ければ幸いである。^{*3}

一
2

次に、文末に補助動詞の尊敬語「給ふ」及び二重敬語「せ給ふ」「させ給ふ」を伴うものをみる。

(12) かたはらなる人をおしおこして、「かれ見給へ。かゝる見えぬものあめるは」といへば、かしらもたげて見やりて、いみじうわらふ。（枕草子、大進生昌が家に。清少納言↓女房）

(13) 行頼押しあけて、「同じくは。これより入らせ給へ」と申せば、「人や見つけむ。軽々し」とはのたまへど、

（夜の寢覚、巻一。乳母子の行頼↓中納言）

(14) 「さらば、かならずみづからものせさせ給へ」とて、渡らせ給ひぬ。（夜の寢覚、巻三。帝↓大皇宮）
これらは命令形による命令・勧誘表現であるが、多くは義門のいう「希求」^{けく}に相当するであろう。義門は「希求」
（「こひねがひもとむる」意）を次のように説く。

世ニイハユル下知ノ詞也。コハ下知ト云ヒテハイカニゾヤ覚ユル事モアルカラニ友鏡ニハ指令トイヘレド、ソ
レモヤハリアタラヌワケアルユエ、略図ニハ又アラタメテ希求ト目ケタル也。主君ニムカヒテ云云シ玉ヘト申ス
玉ヘノヘナド、コレヲ下知指令トイヒテハ当ラヌニアラズヤ。^{*4}

因みに、『源氏物語』他、命令・勧誘表現の例の多い二、三の物語作品における動詞と右の「給ふ」類三語との命

令形の使用状況を示せば次の第1表のようになる。

第1表

	全用例	動詞	「給ふ」類
源氏物語	六四〇	二〇〇	三〇〇
落窪物語	三一〇	一二〇	一三〇
夜の寢覚	一四〇	五〇	七〇

数値は比較の便のため概数にとどめるが、いずれの作品においても「給ふ」類の使用数が動詞のそれを上回っていることは注意すべきであろう。これを待遇表現の面からいえば、右の三物語の場合の命令・勧誘表現は動詞命令形による常体表現よりも「給ふ」類の敬体表現の方が多用されていることである。また、この動詞と「給ふ」類との用例の計はいずれも全用例の八〇%前後に及び、用例の大部分を占める。^{*5}

一 3

続いて右に完了の助動詞命令形「てよ」「ね」が下接する例を挙げる。これは尊敬語を伴うだけに、鄭重ではあるが、助動詞の命令形による働き掛けの強さは変わらない。

- (15) (浮舟は) やうやう頭もたげ給へば、物、参りなどし給ふにぞなかなか面やせもてゆく。「(全快は) いつしか」と、(妹尼は) うれしう思ひ聞ゆるに、(浮舟) 「尼になし給ひてよ。さてのみなむ、生くやうもあるべき」とのたまへば、(妹尼) 「いとほしげなる御様を。いかでか、さは、なしたてまつらん」とて、ただ、いたゞき

ばかりを剃ぎ、五戒ばかりを（僧都より）受けさせたてまつる。（源氏、手習。浮舟↓妹尼）

(16) (母代) 立ち走り、又、君（今姫君）の臥し給へるかたはらに來て、（帳台の）床より（今姫を）ひき下しつゝ、「ここのらの宝を尽して、うへ（洞上）の思し急ぐ幸ひ（入内）を、（御身の心として焼き失ひ滅ぼし給へるにこそあめれな。（御身は）今（入内まで）いくばくの日数の心もとなさに、受領男を急がし給ふぞや。下臈なる身の、物の用多かるだに、名の惜しければ、若うより、物した、かなる男は設け侍らぬものを。いづちにもいづちにも（御身は）早く行き失せ給ひね」と、「恥知り給はぬか」と、爪弾きをしかくるさまの、いとodorodorodorろしう恐ろしげなるに、……（洞上は）物ものたまはで帰りぬる気色を見るに、（母代は）いとど腹立ちまさりて、「（御身は）はやうはやう尼法師になり給ひね。その受領の北の方にて居給ひたらむ後見、（われは）さらにさらにし侍るまじ。おなじさまにて、又殿の中におはせじ。……」と（今姫の）額髪をひき上げて、（母代）「いでやいでや（尼になり給ひね）」と苦みかくる気色、やゝもせば、食ひつきぬべし。（狭衣、卷三。母代↓今姫君）

先ず例文(15)についてみる。『源氏物語』では「給ひてよ」（及び「てよ」）は死を願ひ、出家を願う切実な場面での用例が多い*。ここもその例である。「てよ」に込められた懇願の情、強い訴えを見るのである。

例文(16)には「給ひね」が二例見られる。これ近々入内するはずの姫が、こともあろうに受領男を通わせていたと思ひ込んだ母代がすっかり逆上している場面である。問題の二つの部分の調子は次のようなところであろう。

（あんなのような者は）どこでもかしくこでも、とつとと消えてなくなつておしまひ。
早く早く尼法師になつておしまひ。

怒りにまかせて、行動も言葉も誠に激越である。なお、この例の詳細は既述の論に譲る。^{*7}
次もこうした激しい例の一つである。

(17) 「何事いふぞ。おいらかに死に給ひね。まろも死なん。見ればにくし。聞けば愛敬なし。見捨て、死なんは後ろめたし」との給ふに、(雲井雁の)いとをかしきさまのみまされば、(夕霧は)こまやかに笑ひて、(源氏、夕霧。雲井雁↓夕霧)

嫉妬で心中はなはだ穏やかならぬ雲井雁は、三条邸に帰ってきた夕霧に向かって痛烈な皮肉を浴びせるが、夕霧はそれを冗談めかしてしまふ。雲井雁はついに怒りを爆発させる。右は

何を言うか。文句を言わずに、いっそすつぱり死んでおしまいになるがいい。

といったところで、憤激から発せられた表現である。右の発話が、六つの短文の連続からなるのは甚だしい興奮のせいである。最も短いものは一文わずかに六音節、畳み掛けて、一気にまくし立てている。あからさまに「死ぬ」という言葉を口にすることを含め、激情に基づく言葉である。「給ひね」の表現価値の一面が強く表われている。ただし、「給ひね」が常にこうした激しい調子で用いられる訳ではない。次のような例も見られる。

(18) (男君)「夜いたう更けぬ。(縫い物)多し。寝給ひね」と責むれば、(女君)「いますこしなめり。早う寝給ひね。縫ひ果てらんよ」と言へば、(落窪、卷一。男君↓女君。女君↓男君)

これは継母北の方からの縫い物をしているところで、冗談を言って笑いながら男君も手伝ったりしている。ここでは互いに同じ言葉遣をしている。互いの、うちとけた親愛の情が窺われるように思う。

以上、命令形の例をみてきた。この形式を「①型」と呼ぶこととする。

ところで、①型即ち命令形による表現が、常に狭義の命令を表わすのではない。既に掲げた例からも知られるとおり、そこには直接的な命令の他に、依頼・懇願・懇請、勸奨等々、種々の場合がある。更に「命令・勧誘表現」は、場面―話し手・聞き手の身分関係、その場における力関係の他、要求内容達成の難易即ち聞き手の負荷の程度及び話し手の心理・心情等が絡み合つて、その表現は種々の様相を呈する。既述の補足をかねて例示する。

(19) 「もていまして、深き山に捨てたうびてよ」とのみ責めければ、責められわびて、さしてむと思ひなりぬ。

(大和、一五七。妻↓夫)

姥捨伝説の段。ここは「とのみ責めければ」とあつて、あまりにもひたすらな言い方である。責めたてられ閉口した男はついに、「さしてむ」と思うところまで追い込まれたのである。これは強要・強制である。

(20) 「猶、(その人の事を) たしかにのたまはせよ」とうちつけに責め聞え給ふ。(源氏、宿木。薫↓中君)

中君は、薫の関心を自分からそらすべく、大君に似ている異母妹の浮舟のことをほのめかす。薫はもつと詳しく知りたいと、「うちつけに責め」るのである。この語句は「急に態度を変えて、切実な気持ちで懇願するのである」(「全集」頭注)と説かれている。

(21) 「かういとつらき御心に、うつし心も失せ侍りぬ。すこし思ひのどめよとおぼされば、あはれとだにのたまはせよ」と、おどし聞ゆるを、(女三宮は)いとめづらかなりとおぼして、物も言はんとし給へど、わな、かれて、いと若々しき御さまなり。(源氏、若菜下。柏木↓女三宮)

柏木は女三宮の「あはれ」の一言が欲しい。ひたすらそれを思い詰めている。ここは「うつし心も失せ」た柏木の必死の願いの言葉であるが、「おどし聞ゆる」とあつて、求めるに急なあまり、脅迫的な言い方になっている。

(22) 親、「さだに、あらせ給へ」とおしたちて言へば、男、「あはれ、たれも。(古い妻を) いづち遣らまし」とおぼえて、心のうちかなしけれども、(堤中納言、はいずみ。新しい妻の親↓男)

ここは新しい妻のことで、その親に非難された男が、愛情の深さは他にまさる者はおるまいと思う云々、と言ったのに対する親(男親であろう)の言葉である。「おしたちて言」うとあり、露骨な表情で言う、強引に言うのである。妻ある男に娘を取られた憤慨と不満とから、ほとんど頭ごなしに叱るような言葉を連ねたあとの一句である。前例柏木の言葉と同様、助詞「だに」を含むだけに要求内容も強い。

(23) 冬になりゆくまゝに、河づらのすまひ、いと心細さまさりて、(明石の上)うはの空なる心地のみしつ、明かし暮らすを、きみも、「なほかくてはえ過ぐさじ。かの近きところに思ひ立ちね」と、すゝめ給へど、つらき所おほくこゝろみはてむも残りなき心地すべきを、いかに言ひてか、などいふやうに(明石の上)思ひ乱れたり。(源氏、薄雲。源氏↓明石の上)

ここは完了の助動詞「ね」による。意味も感情も強く深いが勧奨の例である。

(24) (源氏が)おはしますまじき御気色を人々胸つぶれておもへど、「なほ(返事を)きこえさせ給へ」と、その、のかしあへれど、いと思ひみだれ給へるほどにて、え型のやうにもつげ給はねば、「夜更けぬ」とて侍従ぞ例の教へ聞ゆる。(源氏、末摘花。女房達↓末摘花)

女房達が「やはり、お返事を」と互いに末摘花に勧めあつているところ。「その、のかす」は現代語における悪事に

誘う意ではなく、そうするように勧める意である。主人に対する勧奨の例である。

(25) 「今宵はなほ疾く帰_レり給_レひね」と、こし_レらへ_レやり給_レふ。(源氏、東屋。中君↓薫)

ここは匂宮の留守中、薫が二条院に中君を訪れた一節。右は、今も恋々とする薫をなんとか帰そうとする中君の言葉である。

今宵は―なほ―疾く―帰_レり給_レひね。

話し手の息遣いが聞こえるような言葉であるが、相手をうまくすかし宥めて帰そうとしたものである。

(26) (夕霧は入学後) 大宮の御もとに、をさをさまうで給はず。「(大宮が) よるひる、(夕霧を) うつくしみて、

なほ児のやうにのみもてなし聞え給へれば、かしこにはえ物習ひ給はじ」とて、(二条院中の) しづかなる所に(夕霧を) こめたてまつり給へるなりけり。(源氏) 「一月に三度ばかり(大宮に) まゐり給へ」とぞ、許しきこえ給ひける。(源氏、乙女。源氏↓夕霧)

ここは夕霧の大学入学後、父源氏が夕霧の大宮邸訪問を許可した時の言葉である。

(27) 「うちつけに深からぬ心の程と見給ふらん、ことわりなれど、年ごろ思ひわたる心のうちも聞え知らせんとなん、かゝる折を待ち出でたるも、さらに浅くはあらじと思ひなし給へ」と、いとやはらかにの給ひて、鬼神も荒だつまじきけはひなれば、はしたなく、「こゝに人の」とも、えの、しらず。(源氏、帚木。源氏↓空蝉) 空蝉の寝所に忍び込んだ源氏の言葉は「いとやはらか」である。とても優しい。もの柔らかなのである。「評釈」は男はやわらかいものごしである。女の中に育った者の特徴である。女に、男の言葉であることを忘れさす言い方だ。

と説いている。こういう場面で、男は物腰も声も優しくなるのが普通であろう。

(28) 逢ふ人からにもあらぬ秋の夜なれど、程もなく明けぬる心地して、いづれと分くべくもあらずなまめかしき
(中君) の御けはひを、人やりならず飽かぬ心地して、(薫) 「あひおぼせよ。いと心憂くつらき人(大君) の
御さま、見ならひ給ふなよ」など、後瀬を契りて出で給ふ。(源氏、総角。薫↓中君)

薫が姉妹の寢所に忍び入った時、大君は隠れてしまい、薫は中君と語り明かす。短い言葉の中に「あひおぼせよ」「見ならひ給ふなよ」と続くが、文末はいずれも「よ」を伴う。優しく、親しみを込めた表現である。このうち前者は、思いをかけてほしいと望んでいるのであり、中君の愛を求める言葉である。ここまで見てくると筆者は自ら次の現代短歌を連想せざるを得ない。

「また電話しろよ」「待ってる」いつもいつも命令形で愛を言う君(俵万智『サラダ記念日』)

愛を言う場合にも命令形が用いられること古今を問わない。命令形を最終的に「希求言」と名付けた義門の深い配慮を改めて思う。

以上、同じく①型即ち命令形による表現であっても、それぞれの場面やその時々々の状況等によって、その様相が種々なることを見た。

右の①型を推量表現によって和らげたのが次の「未然形+む」の形式である。

これは聞き手の行為の実現を推量の形で述べ、それによって結果として聞き手の行為の実現を求めるものである。つまり「あなたはそうなさるでしょう。そうなさって下さい」ということで、婉曲・間接的な表現によって勧誘・勧奨・懲漚等の表現となる。これを「②型」と呼ぶ。

先ず、話し手自身を含めた勧誘の例を挙げる。

(29) 「いざ、たゞ、このわたり近き所に、心安くて明さん。かくてのみは、いと苦しかりけり」とのたまへば、

(夕顔)「いかでか。にはかならん」と、いとおいらかにいひて居たり。(源氏、夕顔。源氏↓夕顔)

(30) 「……いざ、たぐひなき物がたりにして、(我等が仲をば)世に伝へさせむ」と(玉鬘に)さし寄りて聞え給へば、(源氏、螢。源氏↓玉鬘)

これらは「いざ」という言葉が示すとおり、話し手自身を含めた勧誘である。敬体表現をとらない所以である。

(31) げにこよひは三日の夜なりけるを、(おちくぼの君は)もののはじめにもものあしう思ふらん、いといとほし。雨はいやまさりにまされば、(男君は)思ひわびて、つらづゑつきて、しばし寄り給へり。帯刀、わりなしと思へり。うち嘆きて立てば、少将、「しばしみるたれ。いかにぞや。行きやせんとする」「かちからまかりて、言

ひなぐさめ侍らん」と申せば、君、「さらばわれと行かん」とのたまふ。うれしと思ひて、「いとよう侍なり」と申せば、「大傘一つ設けよ。きぬ脱ぎて来ん」とていり給ひぬ。帯刀、傘求めにありく。(落窪、卷一。男君 ↓ 帯刀)

ここも「われと行かん」とあるように話し手自身を含めた勧誘である。

(32) 「君はいざ給へ。(祭りを) もろともに見むよ」とて、(紫上の) 御髪の常よりも清らに見ゆるを、かきなで給ひて、(源氏、葵。源氏 ↓ 紫上)

賀茂祭に誘っている例であるが、「見むよ」とあって、②型に助詞「よ」のついた珍しい例である。「よ」は主として男から女に対して優しく話し掛ける語である。ここも若い紫上に優しく、親しみを込めて誘ったものである。

(33) 少将、「まことにやあらん、まろにあはせんなど中納言のたまふなるとぞ。めとなる人こそ、殿なる人を知りて、御文いで、北の方もいかでとなむの給ふとて、めとなる人こそにはかに責めしか。『かゝると聞き給へ』と言はんよ。いかおほす」とのたまへば、「心うしとこそは思はめ」との給ふ。(落窪、卷一。少将(男君) ↓ 女君)

右の「言はんよ」も例文(32)同様②型に「よ」の下接した稀な例で、女君(落窪君)を誘い、同意を求めたものである。現代語訳は勿論「言おうよ」となる。^{*8}

続いて、聞き手の行為の実現を求める例を検討していく。

(34) 「はや、御馬にて、二条の院へおはしまさん、人さわがしうなり侍らぬ程に」(源氏、夕顔。惟光 ↓ 源氏)

夕顔が急死した後の惟光の言葉。周知の場面であるから説明は不要であろう。これは

(35) 「はや、おはしまして、夜更けぬさきに、帰らせおはしませ」(源氏、夕顔。惟光↓源氏)

という①型の表現を推量表現によって和らげ、婉曲に慫慂したものである。つまり、「(あなたは)二条院へおいでになるでしょう」という推量が、聞き手の意向を尋ねることになり、そこから更には「おいでになったほうがよろしい(おいでなさいませ)」という気持を表現していることになるわけである。「全集」はここを次のように注する。

「ん(む)」は穏やかに勧め誘う意。…したほうがよろしい。

訳語は右の他「(して) いただきたい」その他、場面に応じてふさわしいものを当てることになる。

(36) 我(道定) もさすがにまだ見ぬ御すまひなれば、たどたどしけれど(邸内に) 人繁うなどしあらねば、寝殿の南おもてにぞ、火ほのかに暗う見えて、そよそよと(衣ずれの) 音する、(匂宮の許に) まゐりて、(道定)

「まだ人は起きて侍るべし。たゞこれよりおはしまさむ」と、しるべして入れたてまつる。(源氏、浮舟。道定↓匂宮)

右は匂宮が道定の案内で宇治に赴いた場面で、前例と同様慫慂の表現である。

(37) 「わづらひし所とても、かならず、かくやは離れさせ給ふ。(朱雀院の) おはします所近く侍らふも、いとかしこきを、(もとの邸へ) わたらせ給はん」とす、めて、(女一宮を) わたい奉らせ給ふ。(夜の寝覚、巻四。内大臣↓女一宮)

これは「す、めて」とあり、その意は明らかであろう。

(38) 中納言はあるけはひし侍り、帥はすべて候はぬ由を奏せさすれば、「あさましき事也。宮をさるべう隠し奉りて、塗籠をあけて組入のかみなどをも見よ」とある宣旨しきりにそふ。「御塗籠あけさせ給はむ。宮去りおはし

ませ」と、檢非違使申せば、今はずちなしとて、(栄花、卷五。檢非違使↓中納言隆家)

長徳の変に際し、檢非違使が伊周の二条邸を搜索している場面である。檢非違使の言葉は「御塗籠あけさせ給へ」という①型の表現に推量の「む」を下接し、婉曲に表現したもので、つまりは「御塗籠をお開けいただきたい」の意となる。

(39) 男君達「や、ものけたまはる。今さらに何かは御殿籠る、起きさせ給はん」と聞えさするに、すべて御いらへもなく、おどろかせ給はねば、よりて「や、」と聞えさせ給ふに、……うせさせ給へるなりけり。(栄花、卷二。男君達↓女御超子)

ここは冷泉院の女御超子頓死の場面。正月の庚申の夜のことである。院の女御超子が暁方、脇息によりかかって寝入ってしまった、そのまま亡くなってしまうという事件があった。この語、注釈書は「起きていただきましよう」と訳している。なお、『栄花物語全注釈』の校異によれば富岡旧蔵本にはこの部分「起きさせ給へ」とある由である。この事実は自ら「起きさせ給へ」と「起きさせ給はん」との比較を促すものであろう。

以上、動詞及び補助動詞「給ふ」の未然形に「む」が下接することによって勧誘・勧奨・懲憑等の意を表わす例をみてきた。

(40) 宮の大夫、御簾のもとにまゐりて、「上達部御前に召さむ」と啓したまふ。聞こしめしつとあれば、殿よりはじめたてまつりて、みなまゐりたまふ。(紫式部、御五十日の祝。宮の大夫↓中宮。この部分、『栄花物語』(巻八)に同文がある)

若宮の御五十日の祝の場面。中宮の大夫が中宮に「上達部を御前にお召しくださいますように」と婉曲に勧奨し

たもの。

二 2

ところで、峰岸明著『平安時代古記録の國語學的研究』「序章」の「儀式用語に関する記述」の項に、この「む」に関わる次のような注目すべき指摘がある。

平安時代の貴族は、儀式の場での言語に細心の注意を払い、その一々について深い関心を寄せる。(中略)そこで、古記録においては、そのような場面の描写は精細で、従ってまた、その言語・表現についても他の資料には求められない具体的な情報がそこから得られる。それらによって、平安時代、朝廷で使用された儀式用語の特徴を摘記すると、次の如くになろう。

として、その(5)に

許諾を求める表現には、推量の助動詞「む」が使用される。

○次左大辨笏申云、史生召^く、予許之、(中右記、嘉承二年十二月十七日)

○向尊者申曰、史生女佐牟、(兵範記、仁平二年正月二十六日)

○奏饗祿事、其詞、上達部已下饗祿給^{はく}、(玉葉、建久二年三月二十八日)

とある(傍線筆者。なお一部表記を簡略化した)。

いずれも一二世紀初期から一二世紀末期の記録である。これらは儀式という最も改まった場における「細心の注意を払」った表現形式であり、その記録も「精細」かつ正確であろう。資料的な価値が高いと考えられる。

初めの二例は「(人ヲ) 召サム」、残る一例は「饗祿ヲ給ハム」というもので、これらの儀式用語はまさに先の『紫式部日記』他の表現とその形式を同じくする。この儀式用語と物語・日記における表現との先後関係は不詳であるが、いずれにしても、先の物語・日記等の表現形式が決して特異なものではなかったことを示す確実な事実である。

右の事実に触発されて、院政期から鎌倉末期の記録類を一瞥した結果を次に記す。

『建武年中行事』の「元日の節会」の条に

次に二献、一献の如く、をはりて、内弁、座をたちて、磬屈して奏して云、まぢきんだちにみき給はん。天許をはりて、参議一人をめしてこれを仰す。

という文が見える。右はいま『新訂 建武年中行事註解』(和田英松著。所 功校訂)によったが、ここにはその註解の部に『江次第』の次の文を引く。

二献 仰^ス御酒勅使^ヲ、内弁起^レ座^ヲ磬折^シ、申^シテ云ク、大夫達爾御酒給^ハ牟云々。

いま表記の相違を別にすれば、二文とも問題の箇所は次のとおりである。

まぢきんだちにみき給はん。

また右『新訂 建武年中行事註解』の正月、叙位の条に

「院宮の御申文めしにつかはさん」と奏す。

とあり、同じく正月、県召の除目の条に

「院宮の御申文とりにつかはさん」と奏す。

とある。この二文に対応する『江次第』の本文の文末はそれぞれ「遣ム」「遣サム」とあって、いずれも「建武年中行事」の本文と表現形式を等しくする。（「尊経閣善本影印集成10」「江次第」他による）。

更に、「冷泉家時雨亭叢書」の『朝儀諸次第 一』の「御元服賀表 白馬節」の条にも次の例を見出す。

内弁……敬折、向御前方奏云、大夫君達_ニ御酒給_{ハム}。

このような例は博搜すれば他にも見られよう。朝儀・公事の場合において、推量の助動詞「む」が許諾を求める表現として普通に用いられていたことが知られるのである。

従来、後述の「……給ひなむ」「こそ……め」の形式以外の単独の「む」（前掲例文(29)から(40)）について、勧誘・勧奨・慫慂等の用法を否定あるいは疑問視する見解が間々見られたが、それが当たらずぬものであることは、右の儀式用語の例の確認によってより明らかになったと考える。

二 3

時代は下るが、ロドリゲスの『日本大文典』では、「命令法の種々な程度に就いて」の項で、

未来はこの最後の言ひ方（筆者注「上げさせられい・読ませられい・習はせられい」の「させられい」をさす）よりも更に高い敬意を示すので、次に最も低いものから最も高いものまでの順序に従って、その言ひ方を並べて見る。（傍点筆者）

として、「上げよ」「来い」を例として、それぞれ十段階、八段階に並べている。「来い」の例を次に引用する。

- 1 来い。
- 2 いらい。
- 3 おりやれ。
- 4 おぢやれ。
- 5 ござれ。
- 6 ござらう。
- 7 お出でなされ

い。 8 お出でなされう。^{*9}

右の8の「お出でなされう」という未来の言い方が最も敬意が高いというのである。

これは慶長頃の事実を伝えるものである。ロドリゲスの観察の精緻さには誠に敬服の他はないが、ともあれ、未
来―推量表現という、間接的・婉曲的な叙法が敬意の表現につながり、より丁寧な命令表現になるものと思われる
のである。

なお、コイヤードの『日本語文典』にも「命令形未来は」「単なる命令形よりも一層敬意を表した言ひ方であり、
上品である」という指摘が見える。^{*10}

これらは本稿でいう②型と、その表現方法及び表現価値を同じくする。

ところで、現代語の勧誘の「書こう」「行こう」等は、歴史的にこの②型の流れに位置すること言うまでもない。
例えば「書こう」は

1 「書か―む (mu)」→2 「書か―む (m)」→3 「書か―ん (n)」→4 「書か―う (u)」

と推量の助動詞「む」が転じ、その「書か―う」の部分が更に長音化したものを承けたものである。(従って「書こ
う」は「書こ―」「書こお」と表記しても同じことである)。こうした経緯によって生れた「書こう」「行こう」は現
代語における一般的な勧誘表現の形式である。

右は数次の変遷を経ているが、次はより②型に直接し、その原形をとどめる。

雪やこんこ霰やこんこ。／降っては降ってははずんずん積もる。……。

雪やこんこ霰やこんこ。／降っても降ってもまだ降りやまぬ。……。〔文部省唱歌〕

でんでん虫々 かたつむり、／お前のあたまは どこにある。／角だせ槍だせ あたまだせ。

でんでん虫々 かたつむり、／お前のめだまは どこにある。／角だせ槍だせ あたまだせ。〔文部省唱歌〕

ねんねんころりよ おころりよ／坊やはよい子だ ねんねしな ……。〔子守唄〕

右の傍線部は、擬態語として理解されているが、いずれも本来勧誘乃至命令の意であろう。即ち「こんこ」は「雪よ、降り来む」の意の「来む来む」であること、

雪やこーんこん 霰やこーんこん お寺の柿の木にいっぱい積もれ こーんこん。

という童唄に照らして疑いなく、「でんでん」は「出む出む」即ち「出よう、出よう」であり、「出る、出る」であるという。「ねんねんころりよ」は「ねんねんころりよ」ともあって、子守唄のうたい出しに必ずついている唱え言で、「寝む寝むしろよ」の意であり、この唄は「寝よう寝よう」と眠りを誘う眠らせ唄である。なお、この子守唄は「宝曆、明和の頃からうたわれていたといわれる古いパターンをもっている」という。^{*11}

右の表現はまさに②型そのものである。これらの語句は前述「書こう」の例で言えば、3の「書かーん（n）」の

段階に相当するが、歌や唄の詞句なるがゆえに、こうした旧形をとどめたものと思われる。そしてこれは、かつて「未然形十む」による勧誘表現がごく普通に行われていたればこそ、こうした歌詞があり得た訳であろう。

②型の表現形式—その原理は今に生きているのである。

二 4

次は助動詞「つ・ぬ」に「む」が下接する例を挙げる。

(41) 三の君、まことと思ひて、あはれにて、母北の方に、「あこきをさへ何しにさいなむ。使ひつけて侍れば、なきはいとあし。召してん」とのたまへば、(落窪、卷一。三の君↓母北の方)

『あゆひ抄』の「何てん」の項に次のような説明が見える。

これらのて文字、確かになすわざを言ふ故に状をうけず。

ての字とんの字の心をあはせて心得ればやすきなり。たとへば「求めてむ」とよむは「求めむ」とのみよむよりは確かにしおく心添へり。^{*12}

この助動詞「つ」の未然形「て」は「確かになすわざを言ふ」「確かにしおく心」を添えるものだという。従つて、右に倣つて言えば、例文(41)の「召してん」は「召さん」よりは確かになすことを求めた表現ということになる。

(42) 「衛門督のおはするなめり。我を嫌疑のものと、や、^(ママ)とらふと思ひつるにこそ死にたりつれ。我、足白き盗人とつかけたりつるこそをかしかりつれ」など、たゞふたり語らひてわらひ給ふ。「あはれ、これより帰りなん。くそつきにたり。いと臭くて、行きたらば中々疎まれなん」とのたまへば、帯刀わらふわらふ「かゝる雨にか

くておはしましたらば、御心ざしをおぼさん人は麝香の香にもかぎなしたてまつり給ひてん。殿はいとほくなり侍りぬ。行くさきはいと近し。なほおはしましたん」と言へば、かばかり心ざし深きさまにておりたちて、いたづらにやなさんとおぼしておはしぬ。(落窪、卷一。男君↓帯刀。帯刀↓男君)

ここには男君と帯刀との会話があり、互いに②型をもつて表現している。男君の言「帰りな―ん」は帯刀に向かつて帰ろうと言ったもので、自らを含めた勧誘である。帯刀の言は主人に向かつて「おはしましたん」と推量表現によつて和らげたもので、勧奨・懲懾である。

ともに助動詞「ぬ」を含み、「てん」と同様に「確かに(しよう)」といった強い表現である。特に帯刀は「殿はいとほくなり侍りぬ。行くさきはいと近し」だから「なほ」と理由を挙げて強く勧めているところである。ただし、「おはしましたん」との差をみるべきである。

(43) (新婚の) 三日が程は (源氏は) 夜がれなく (女三宮方に) わたり給ふを、(紫上は) 年頃、さもならひ給はぬ心ちに忍ぶれど、猶、物あはれなり。……われながら、(我身を) つらくおぼし続けらるゝに、涙ぐまれて、「今宵ばかりは (女三宮方行きを) ことわりと、ゆるし給ひてんな。(御身に) これより後のとだえあらんこそ、(我が) 身ながらも、心づきなかるべけれ。また、さりとて (女三宮への疎隔も) かの (朱雀) 院に、聞し召さんことよ」と、思ひ乱れ給へる御心のうち、苦しげなり。(源氏、若菜上。源氏↓紫上)

女三宮が降嫁して六条院に入った。その新婚三日の夜の、源氏と紫上の複雑な心情を描いた部分で、源氏は思い乱れながら苦しげに女三宮方行きの了解を求めているのである。源氏には自らへの反省もあり、その言葉には心理的な劣位が見られるであろう。その故に「ゆるし給ひてよ」という直接的・直線的な物言いができないのである。

なお、これは②型の文末に終助詞「な」の下接した極めて珍しい例であるが、これも源氏の懇請の気持の表われであらう。

(44) この聖(兄)も、あはれに悲しうて、「真にさやう(妊娠)におはせば、(出家は)いかでか。たゞしばし、かくて心安く物し給ひなん。あなかしこ、人に知らせ給ふな」と、尼君にも語らひ置きて、(狭衣、巻一。聖↓
飛鳥井姫君)

「物し給ひね」に「ん(む)」をつけて、婉曲に勧奨したものである。

三

三
1

さて、先の②型に係助詞「や」が下接すると「……むや」の形となる。この形式を「③型」と呼ぶ。先の②型は、聞き手の行為の実現を推量の形で述べ、それによって結果として聞き手の行為の実現を求める婉曲・間接的な表現であったが、③型はこの②型に更に疑問の意の「や」を重ねた形であり、一層婉曲・間接的な表現である。鄭重に聞き手の意向を尋ね、相手を立てながら勧誘、依頼することになる。「や」の意味はいわゆる「疑問」であるが、これを「疑い」と「問い」に分けるなら「問い」である。^{*13}

(45) 夕つけゆく風いと涼しくて、かへり憂く、わかき人々は思ひたり。(源氏)「心やすく、うち休み、涼まむや。
(私も)やうやう、かやうの(若人の)なかに厭はれぬべき齡にもなりにけりや」とて、西の対に渡り給へば、

きむだちみな御送りに（源氏の後につき）まゐり給ふ。（源氏、常夏。源氏↓きむだち）

ここは六条院の釣殿の場面で、自分がいては窮屈だろうと察した源氏が、内大臣の君達・夕霧たちに夕涼みを誘った言葉である。聞き手の意向を尊重しながらの勧誘となっている。

(46) 「この世にの、しり給ふ光源氏、かゝるついでに見たてまつり給はんや。世を捨てたる法師の心地にも、いみじう世の憂へわすれ、齡のぶる、人の御有様なり。いで、御消息聞えむ」とて、立つ音すればかへり給ひぬ。
（源氏、若紫。僧都↓尼上）

佐伯梅友編『校註日本文藝新篇源氏物語新抄』は頭注で「こうした機会にお拝みになりませんか」と訳し、続けて原文には打ち消しはないのであるが、今はこういう場合には打ち消しを入れてたずねる。いい方のちがいに注意。

と解説する。適切な解説といふべきである。

(47) 「……琵琶は、押手しづやかなるをよきにするものなるに、柱さすほど、撥音のさま変りて、なまめかしう聞えたるなむ、女の御ことにて、なかなかをかしかりける。いで遊ばさんや。御琴まるれ」との給ふ。（源氏、紅梅。按察大納言↓宮君）

「さあ、ひとつお弾きなさいませんか」と、琵琶の演奏を勧めているところで、優しく勧奨しているのである。

次には依頼の例を検討する。

(48) 「わがいと思ふさまに（落窪の姫君）おはすなるを、かならず（姫に）御文伝へてんや」との給ひしかば、

(落窪、卷一。交野の少将↓姫の女房少納言)

これは「必ず私の手紙を姫に渡してくれるでしょうか(渡してくれませんか)」という婉曲な依頼である。他家の女房に対する言葉遣である。

(49) 女「ぬし(旧夫)に消息きこえむは申してむや。文はよに見給はじ。たゞ、言葉にて申せ」といひければ、「いとよく申してむ」といひければ、(大和、一五七。女↓旧夫の召使の童)

この「申してむや」も同様の依頼である。依頼を受けた童は「いとよく申してむ」と、それをしっかりと引き受けている。なお、依頼したあとに、その方法を具体的に指示する部分は「申せ」と命令形による表現、即ち①型になっているのも自然であろう。

(50) (源氏は空蟬のことが)御心にかゝりて苦しく思しわびて、紀の守を召したり。「かの、ありし中納言の子(小君、空蟬の弟)は、得させてんや。らうたげに見えしを。身ぢかく使ふ人にせん。上にも、われたてまつらん」との給へば、(紀守)「いとかしこき仰言に侍るなり。(されど)姉なる人にの給ひてん」と申すも源氏は胸つぶれて思せど、(源氏、帚木。源氏↓紀伊守)

ここで源氏は「得させてんや」と常体表現をしている。つまり、紀伊守は「給ふ」を必要とする相手ではない。両者の身分の懸隔は大きい。しかし、依頼者の源氏は「得させてんや」と③型の表現をして婉曲に依頼している。一方の紀伊守は源氏に対して尊敬語を使いながらも「の給ひてん」(おっしゃっていただきましたように)と②型で答えている。ここでの両者の立場を窺わせて面白い例である。^{*14}

次も同様身分の懸隔の大きい例である。

50) (夕霧)「五節は、いつか内裏へはまゐる」ととひ給ふ。(童)「今年とこそは聞き侍れ」ときこゆ。(夕霧)

「かほのいと良かりしかば、すゞろにこそ恋しけれ。(五節を) ましが、つねに見るらんもうらやましきを。又、見せてんや」との給へば、(童)「いかでさは侍らん。……」ときこゆ。(源氏、乙女。夕霧↓童)

夕霧は五節の舞姫に選ばれた惟光の娘を一目みて心ひかれ、娘の兄(童殿上)に、また会いたいからと頼んでい
る。前例と同じく両者の身分の懸隔は大きい。それは童の言葉の引用が「きこゆ」で表現されていること及び童が
夕霧に対し「侍り」を用いていることから知られる。もちろん「給ふ」を必要とする相手ではない。「まし」(お
前)と親しみをこめて気軽な言葉遣をしているようでありながら、依頼の言葉は「見せてんや」と③型を用いる。
依頼者の立場と③型の表現価値とを端的に示すものであろう。

52) (匂宮は浮舟のいる) 宇治へ忍びておはしまさん事をのみ思しめぐらす。……(匂宮)「いと難きことなりと
も、わが言はんことは、たばかりてんや」などの給ふ。(道定は) かしこまりてさぶらふ。(源氏、浮舟。匂宮
↓大内記道定)

匂宮は道定に宇治行きの計画を相談する。道定は匂宮に取り入って昇進したいと願っている男である。身分の差
から言って当然常体表現であるが、匂宮の言葉は③型で、下手に出た言い方である。その依頼者としての心理は、
「いと難きことなりとも」という表現にも窺われよう。

「たばかり」は計画する、工夫する、配慮する等の意味であるが、その命令形「たばかれ」は女との対面の手引き
を求める場面で用いられることが多い。匂宮には他に、

53) 「まづ、時方、入りて侍従に逢ひて、さるべき様にたばかれ」(源氏、浮舟。匂宮↓匂宮家司時方)

という例がある。こちらは家司時方に対するもので、①型の直接的な命令である。例文⑤②との相違は、二例の話し手と聞き手との関係の相違からくるものである。この二例の比較によっても、①型・③型それぞれの表現価値を確かめ得ようと思う。

例文④⑧以下これまで「てむや」の例を見てきた。続いて「なむや」の例を挙げる。

54 (明石入道)「……古きところ尋ねてとなん思ひよる。さるべきもの(費用)は、あげ渡さむ。修理などして、かたのごと、人住みぬべくは、(旧邸を)つくろひなされなんや」といふ。(源氏、松風。明石入道↓預りの男)

明石入道は大井の旧邸に娘明石上を住ませようとして、その邸の留守番に修理を依頼する。「全集」はここを次のように説明する。

「なされなむや」の「れ」は、軽い尊敬で、入道が留守番の機嫌を損ねないよう下手に出た言い方。預りの男に対して、軽くとも尊敬語を使うとともに、③型の表現をとるところに、話し手の、機嫌を損ねまいとする配慮と、心理的な劣位が見られよう。

55 「今宵いとさうざうしく侍るべき。いと、いと、いと、かしくとも、わたりおはしましなんや。おきな、ここならば舞ひて御覽ぜさせん」ときこえ給へれば、(うつほ、蔵開上。正頼↓兼雅・式部卿宮)

これは「いと、いと、かしくとも」と最高度に恐縮しながら依頼―懇請している例である。恐縮の心情と③型の形式とがよく照応しているように思う。

次は「給ひ十なむや」の例をみる。

56 「しばしは、夢かとのみ、たどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべき方なく、たへ難きは『如何

にすべきわざにか』とも、問ひあはすべき人だになきを、忍びてはまゐり給ひなむや。若宮の、いとおぼつかなく、露けきなかに過ぐし給ふも、心ぐるしう思さるゝるを、とく、まゐり給へ（源氏、桐壺。帝↓更衣の母）

ここには一発話中に③型と①型との両形式が出てくる。

『湖月抄』では「まゐり給ひなむや」の部分に「母君に参内あれと也」と傍注している。文末の「とく、まゐり給へ」も参内を求めている語であるが、両者の順序は抜き差しならぬもののように思われる。それは、婉曲・間接的な表現から、更に理由をあげての直接的な表現へ、ということであるが、これが勧誘・依頼の場面の自然であろう。また眞淵は『新釋』で「まゐり給ひなむや」の部分『湖月抄』と等しく釈し、更に「とくまゐり給へ」の部分に注して

上には給ひなむやとゆるくのたまひこ、にはかくのたまへる様まことに其時の御有様みるが如し。（傍点筆者）と説いている。この「給ひなむや」という表現は自らその場の息遣いを感じさせるであろうし、また③型の表現価値をも鮮明に物語っているように思うのである。

なお、右の「忍びてはまゐり給ひなむや」という桐壺の帝の言葉について玉上琢彌『評釈』は「鑑賞」欄で「ずいぶん相手を立てた言いようである」と言っている。確かにそのとおりであって、ここは帝から更衣の母に対する③型の表現なのであり、「給ふ」の使用とともにその感を強くする。

③型とは、「む+や」即ち推量に問いを重ねた婉曲・間接的な形式であった。これは換言すれば相手（聞き手）の自由意志を尊重し、相手の選択に委ねるものである。根底には相手に対する深い配慮があろう。

桐壺の帝には命令・勧誘表現の例が一〇例あるが、③型の例はこれ以外にはない。しかし、これは当然であろうと思う。右の例は、更衣亡きあと、ただ涙にひぢ、堪え難い悲しみの中におられた帝の言葉である。「人も心弱く見たてまつるらむ」とある帝自身の心弱さと、更衣への愛ゆえの、その母に対する優しさが、このような、むしろ例外的な表現となったものと見るべきであろう。

続いて「給ひ+てむや」の例を中心にみる。

⑤⑦ 「あやしきことなれど、幼き御後見におもほすべく（尼に）きこえ給ひてむや。……」（源氏、若紫。源氏↓僧都）

⑤⑧ 「げにうちつけなりと（女房が）おぼめき給はむもことわりなれど、

初草の若葉の上を見つるより旅寝の袖も露ぞかはかぬ

ときこえ給ひてむや」との給ふ。（女房）「……」と（源氏に）きこゆ。「おのづから『さるやうありてきこゆるならむ』と思ひなし給へかし」との給へば、（女房は）入りて（尼に）きこゆ。（源氏、若紫。源氏↓女房）

右の二例は北山で若紫の素姓を聞いた源氏が僧都や女房に尼君（紫上の祖母）へのとりなしを依頼している場面のもの。

依頼者としての源氏の立場や心理は、その言葉遣によく反映している。先ず僧都に対しては「あやしきことなれど」と遠慮し、女房に対しても「給ふ」を繰り返し、また「かし」によって和らげ、優しく持ち掛けている。二つの「きこえ給ひてむや」は遠慮がちに、相手を立てた依頼の言葉である。

こうして尼君に会った源氏は若紫の世話を申し込むが、そこにも次の③型の表現が出てくる。

(59) 「あはれにうけ給はる(紫の)御有様を。かの過ぎ給ひにけむ(紫の母の)御かはりに(私を)おぼしないてんや。……。『(私と)おなじさまに(紫は)ものし給ふなるを、(私を紫の)たぐひになさせ給へ』と、いと聞えまほしきを、かゝるをり侍りがたくてなむ。……』と(尼に)聞えたまへば、(尼)「いと嬉しう思ひ給へぬべき御事ながらも……」との給ふ。(源氏、若紫。源氏↓尼君)

ここで源氏は尼君に対して、「せ給へ」という二重敬語によって高く遇している。(右に続く源氏の言葉の中には尼君に「御覽ぜよ」という最高敬語も使っている)。

(60) 「……。まろ(われ)を、昔さまになずらへて、は、君と思ひないたまへ。(母なれば君の)御心にあかざらんことは、心苦しく」など、いとまめやかにて、きこえ給へば、……。(玉鬘)「何事も、思ひ知り侍らざりけるほどより、親などは見ぬ物にならひ侍りて。ともかくも思うたまへられずなん」ときこえたまふ様の、いとおいらかなれば、「げに」とおほいて、(源氏)「さらば、世のたとひの(如く)後の(親)をそれ(実の親)と思いて、(私の)おろかならぬころざしのほども、見あらはし果て給ひてんや」などうち語らひ給ふ。(されど玉鬘恋しと)おぼす様のことはまばゆければ、(言葉に)えうち出で給はず。気色あることばは、時々ませ給へど、(玉鬘は)見知らぬ様なれば、すずろにうち嘆かれて、わたり給ふ。(源氏、胡蝶。源氏↓玉鬘)

右は、玉鬘の「後の親」である源氏の言葉である。「おろかならぬころざしのほど」は「ちと好色かたをふくませたり」(『岷江入楚』)という。ほとんど懸想人の言葉である。源氏は自らの玉鬘への想いの故に、カラツとした、直線的な物言いが出来ないでいるところであろう。ここは「おぼす様のこと」のさすがに「まばゆく、心の鬼に忸怩たる話し手の心の揺らぎをそのままに反映した表現と解したい。

三
2

因みに、峰岸明著『平安時代古記録の國語學的研究』では、補助動詞「タマフ」は「被：給」の形で「懇請」の表現に使用されることが多いとして、次のような例を挙げる（一部を示す）。

被恩及給者甚以所望也

案内被示給者幸甚々々

殊賜恩察尤可被下坐給者也

そして、『三卷本 色葉字類抄』に、

被及給哉ヲヨホシタマハレナムヤ（遠・疊字）

とあるのは、この書簡文の懇請表現に該当するものだという。^{*15}

右の「ヲヨホシタマハレナムヤ」はまさに③型である。「乞詞」とあるように、③型によって婉曲に懇請しているのである。『三卷本 色葉字類抄』所載という事実は、当時（平安時代末期）この表現形式が日常普通に用いられたことを確実に示すものであり、既述の②型の場合（「召さむ」の例）と同様に、③型が物語等の文学作品における特殊な表現形式ではなく、一般的な表現形式であったことを物語るものであろう。これは③型の表現形式の性格を考える上で重要な意味をもつものである。

ここで、改めて③型文末の「や」の意味を確認しておきたい。なぜなら、この「や」については、従来次のような種々の見解が見られるからである。即ち、疑問の意味のない終助詞とするもの、感動・感嘆あるいは詠嘆の意とするもの、終助詞で確かめの意とするもの等である。^{*16}しかし、これらの見解はいずれも当たらない。なぜなら、この「や」は以下の「や」と同じものだからである。

(イ) (夕霧) 「おとゞの御心のいとつらければ、さばれ、思ひやみなんと思へど、恋しうおはせんこそ、わりなかるべけれ。などで、少しひまありぬべかりつる日ごろ、よそにへだつらん」との給ふさまも、若うあはれげなれば、(雲井雁) 「まろも、さこそはあらめ」との給ふ。(夕霧) 「恋しとは、おぼしなんや」との給へば、すこしうなづき給ふさまも幼げなり。(源氏、乙女。夕霧↓雲井雁)

ここは若い夕霧と雲井雁が互いに愛を確かめあっているところである。夕霧が、内大臣のせいで諦めようと思うが、そうになったら、あなたが恋しくてたまらないだろうと言うと、雲井雁は、私もそうよと応ずる。夕霧は重ねて、別後も私を思ってくれますか、と尋ねたものである。「や」の意味は「問い」である。なお、『大成』の校異によれば、この部分河内本は次のとおりである。

恋しとはおほしなんやと、いたまうに

「問ひ給ふ」とあって「や」の意味は明らかである。次の二例の「や」の意味は説明を要しまい。

(ロ) (狭衣) 「……京にはものし給ひなんや。いつまでかくては」など問ひ給へば、(狭衣、卷二。狭衣↓山伏)

(ハ) (少将) 「君は妻はなどていままで持たまへらぬぞ。やまめ臥ししてはいと苦しきものを」とのたまへば、少のいらへは、「あはする人のなきうちに、ひとり臥して侍るもさらに苦しくも侍らず」と言へば、少将、「さは苦しからずとて、妻も設けでやみ給ひなんや」。少、「あはする人や侍るとて待ち侍るなり」(落窪、卷二。少将 ↓兵部の少)

右(イ)(ロ)(ハ)の「や」の意味は「問い」である。先の③型、命令・勧誘表現の例でも、「や」によって相手の意向を尋ねるのであり、それによって②型よりも一層婉曲な、柔らかな勧誘・依頼の表現になっているのである。結局、両者(③型と右(イ)(ロ)(ハ))は「むや(推量―問い)」という同一の表現形式の二つの用法である。即ちこれは(イ)(ロ)(ハ)の例のように単に「問い掛け」とどまっているか、それとも「問い掛け」の形で表現しながら、一歩進んで行為の実現を相手に向かって要求・希求しているか、の相違である。

今、二つの用法とあったが、しかし、実は両者は截然と分けられるようなものではない。両者の差は一歩であり、更にその中間は段階的・連続的なものである。二つを分かつのは話し手の表現意図如何であり、従って、次の例のようにその区別のつけ難いような例がしばしば見られるのも、むしろ当然であろう。

(二)(中納言)「わざと召し侍りつるしは何事にか侍るべき。おろかならぬ御贈り物などの侍るべきぞ」と聞こえたまへば、(今大将)「いかでかたゞには侍らん。なべてにはあらぬ御引出物侍らば、日ごろの御恨みは残りなくとけ給ひなんや」と、うちほ、笑みて聞こえ給へば、「(歌、略)いかなる世にか」とておしのごひ隠し給へり。「(歌、略)さて不用ななり。思ひとまりなん」との給ふ御けしきも、いとすくよかなり。(とりかへばや、卷四。今大将 ↓中納言)

ここは「とけ給ふ」と下二段の自動詞であり、直訳すれば「恨みがなくなる」となる。ここは、

「日ごろのお恨みはすっかりお許しくださいませか」と、大将は意味ありげな笑みを浮かべて申し上げなさる。

(中世王朝物語全集12、とりかへばや)

と現代語訳されているが、これは秘密を知らぬ中納言に対して、優越する立場にある今大将の、にやにやしなうが(「うちほ、笑みて」)の言葉であり、更に、後文であっさりと取り止めに行っているところを見ても、結局、ごく軽い気持ちで尋ねたものと解すべきものであろう。ただ話し手の意図如何を解釈、決定するのはやはり容易ではない。

(ホ) (北の方)「まことは、わがいはむこと聞きてむや。ありしある財、みな渡さむ。願はむことは、難かるべきことなりとも、さながらなさむ」とのたまへば、博打、「仰せたまはむことは、難かるべきことなりとも、うけたまはらむ」と申す。(うつほ、忠こそ。一条の北の方↓博打)

「聞きてむや」と無敬語であるのは、話し手と聞き手の身分関係からいって当然であろうが、これを「問い」とどまるものと解するか、「依頼」ととるかはその前例同様それほど簡単ではない(ここは結論としては「依頼」と解する)。

③型の「や」は係助詞の文末用法である。係助詞「や」は疑い、問い、反語の意味をもつが、このうちの問いの場合が命令・勧誘表現に関わるのである。

先に触れた、「や」についての他の種々の見解はいずれも当たらない。それは係助詞「や」の文末用法一般に照らしても、また③型の表現構造を説きえないことからみても明らかである。「や」の意味は「問い」でなければならぬ。(諸説についての詳細はここでは省略に従う)。

なお、この問題に関して岡崎正継「意志質問の『むや』『てむや』『なむや』」の論があり、参考になろう。^{*17}

四

以上、①型・②型・③型の用例を掲げ、それぞれの表現価値を検討し、あわせて「や」の意味に触れた。用例も多く、説明も多岐にわたったので、ここで同一の述語動詞の例で概括しておく。

例えば、「おはしね」(①型)を推量表現によって和らげると、「おはしなむ」(②型)となり、更にそれに疑問表現(問い)が加わると一層婉曲・間接的な「おはしなむや」(③型)となる。次に各例を簡単に示す。

①型 「早う、さぶらひにまれおはしね」(落窪、卷一。あこき↓帯刀)

②型 「いとよき事。これは君得たまはずとも、をのれあればおはしなん」(落窪、卷四。男君↓女君)

③型 「渡したてまつらん所におはしなんや」(落窪、卷一。男君↓女君)

同様に、「おはしましね」(①型)、「おはしましなむ」(②型)、「おはしましなむや」(③型)の例を示す。

①型 「ただ、具しておはしましね」と、御手をとりてをめき叫びたまふ。(讃岐、上。大弐の三位↓眼前の死せる堀河天皇)

②型 「行くさきはいと近し。なほおはしましなむ」(落窪、卷一。帯刀↓男君)

③型 「もしのたまふさまなるつれづれならば、かしこへはおはしましなむや」(和泉式部。帥宮↓作者)

右は、同一の動詞の例で①型(命令形)↓②型(む)↓③型(む+や)の関係を最も簡明、単純な形で示したのである。

次に「やは……ぬ」「やは……給はぬ」という「反語……否定」の形式によるものをみる。これを「④型」と呼ぶ。

(6) (薰)「さらば、その心安からむ所に、消息し給へ。身づからやはかしこに出で給はぬ」と、のたまへば、(弁尼)「仰言を(浮舟に)つたへ侍らん事はやすし。今更に京を見侍らむことは物うくて、宮にだにえ参らぬを」と聞ゆ。(源氏、東屋。薰↓弁尼)

これは薰が弁尼に浮舟への仲介を依頼したものである。ここを宣長は次のように説く。

古今集の、さくら花春くは、れるとしだにも人の心にあかれやはせぬといふ歌と、同格のてにをはにて、みづからかしこに出給へかしといふ意也。(『源氏物語玉の小櫛』九の巻。傍点筆者)

更に『詞の玉緒』(四之巻)では、右の歌の他、「やはせぬ」という句を含む数首の歌を挙げて、

件の歌どものやはは一つの格にて、初学の輩の心得がたく思ふこと也。古今の「あかれやはせぬは、何とてあかれぬ事ぞ、あかれよかしといふ意。「こたへやはせぬは、こたへよかしといふ意也。其外のもこれになぞらへて心得べし。

と説明している。また「大系」の頭注では

君自身まあ、その隠れ家に出かけて下されませぬか。(出かけて下されよ。)

としているが、右に見るとおり、これは「反語……否定」の形式による、婉曲な屈折した依頼の表現である。

なお、尾崎知光氏は「『やはぬ』の特殊用法」という論文で、この形式が、普通の反語（「……ではないか、……である」）の意と違って、希望——「相手に向けて呼びかけ誘ひかけ、『……しませんか、して下さい』といふ意をあらはすもので」あることを詳説しておられる。^{*18}

(62) (北の方)「……かかることなむあると、かしこ(夫千蔭)に語らむと思へど、かかる(継母、継子の)仲らひを、昔より腹汚きものに人のいへば、あぢきなくてなむえものせぬ。君やは忠こそが帝にかう奏したるやうに(千蔭に)告げたまはぬ。祐宗「いと易きことなり。……」。 (うつほ、忠こそ。北の方↓祐宗)

右は忠こそを恨んだ一条の北の方が亡夫の甥祐宗を語らって、奸計をめぐらしているところである。ここは相手を詐っているだけに、直接的、直線的な物言いが出来ないでいるものと考えられる。「大系」は千蔭に仰有って下さいませんか。おいやですか。

と頭注する(傍点筆者)。「おいやですか」は遠慮がちな依頼の調子を汲んだものであろう。

(63) (源氏)「上達部の車ども多くて、物騒がしげなるわたりかな」と、やすらひ給ふに、よろしき女車の(女房達が)いたう乗りこぼれたるより、扇をさし出で、人(源氏の供人)をまねき寄せて、「こゝにやは(御車は)立たせ給はぬ。所さり聞こえむ」と聞こえたり。(源氏、葵。女(源内侍)↓人(源氏の供人))

葵祭の日、源氏は紫上とともに見物に出るが、物見車が立て込んで車を立てる場所がない。困っていると女が源氏の供人に向かって、場所を譲ろうと言う。

ここに車をお立てになられませんか。場所をお譲り申しませう。

右は「よろしければ、どうぞ」の気持で、婉曲に勧めたものである。

(64) (仲忠)「……そのうちに、今日の御饗に、仲忠が手(弾琴)仕うまつらむは、蓬の野辺に蛙の声する心地なむ仕うまつるべき」と聞こゆるに、あるじのおとど(兼雅)、「好き者や。なほ仕うまつりて、重き禄やは賜はらぬ」。左大将、「正頼がらうたしと思ふ女の童はべり。今宵の御禄にはそれを奉らむ」とのたまへば、からうじて、万歳樂ほのかに鳴らして弾くときに、(うつほ、俊蔭。兼雅↓仲忠)

ここは左大将正頼が、娘を禄として仲忠に琴を弾かせる場面で、右は遠慮し辞退する仲忠に対する父兼雅の言葉である。琴を弾いて、禄を頂戴せよと傍から勧めているのである。

(65) 「さらに、身には『三十日二十夜はわがもとに』といはむ」といへば、前なる人々笑ひて、「いと思ふやうなることにもはべるかな。おなじくはこれを書かせたまひて、殿にやは奉らせたまはぬ」といふに、(蜻蛉、中巻。侍女↓作者)

「殿におさし上げなさいませんか」と勧めたもの。

(66) 「……後に聞きしかば、(兼家)『ありしところに女子生みたなり。さとなむ言ふなる。さもあらむ。ここに取りてやはおきたらぬ』などのたまひし、それななり。させむかし」など言ひなりて、(蜻蛉、下巻。兼家↓作者)

これは、兼忠女腹の兼家の娘を養女としようという兼家の言葉である。「ここに引き取って住まわせないかね」と言うのであるが、婉曲に提案し、同意を求めたものと解される。

五 2

ここで「やは……（給は）ぬ」という形式の表現価値について改めて考えようと思う。

- (67) 司召にもなりぬ。女御奏し給ふ。「宮内卿忠保の朝臣は、よき司はえ賜はるまじき人にや侍らむ」。上、「さも聞こえず。よろしき人なんめるを、嗟峨の院の御ために過ちしたることありて沈む、とこそ聞きしか」。女御、
 「さ侍らば、いとあはれにて侍るなるを、修理大夫の空きて侍るなるにやはなさせ給はぬ」。上、「など、労るべきやうやはある」。女御、「さも侍らねど、兵衛が親方にて、常に申さすれば」など聞こえ給へば、なされぬ。
 (うつほ、国譲^下。藤壺女御(あて宮) ↓帝)

ここは司召の際に藤壺の女御が帝に向かつて、忠保の朝臣の取り立て方を依頼し、「修理大夫が欠員だそうでございますが、(忠保を)それになさって下さいません(でしょう)か」と奏している場面である。これは極めてつつましやかな、遠慮がちな物言いであって、その控え目な姿勢は「修理大夫の空きて侍るなるに」にも窺われるのである。婉曲、間接的な④型の特色がよく表れているように。

ところで、『うつほ物語』には、

- (1) 女房になし給はんや。(楼上・下)
 (2) 御弟子にやはなし給はぬ。(忠こそ)

という例が見られる。この

- (1) (A) になし給はんや。……………③型

(2) 「へA」にやはなし給はぬ。……………④型

の両形は、現代語としては最終的にはともに「へA」にして下さいませぬ(でしょう)か」とすべきものであろうが、いま仮に両者の相違を際立たせるべく原文に即して逐語的に直訳すれば、それぞれ

(1) 「へA」ニナサルデシヨウカ

(2) 「へA」ニハナサラヌノデスカ

となるであろう。

右③型と④型との形式上の相違は、「……………むや」と「やは……………ぬ」、即ち「推量—問い」に対する「反語……………否定」の相違、「や」の位置如何及び「は」の有無による。④型で、文中に位置する「や」の機能は、文全体の内容を問い掛けるとともに、「や」に上接する内容に関する遲疑の念が、「や」が文末に位置するものに比べて、相対的に強くなるであろう。例えば、前掲例文(6)の「身づからやはかしこに出で給はぬ」においては、薫は弁尼自身に隠れ家の訪問を求めたものであるが、そこへは「荒ましき山道」「人々のかく恐ろしくすめる道」を分けて行かねばならぬ。薫もさすがに遠慮がちに依頼しているのである。この

「身づからやはかしこに出で給はぬ」

を仮に次の

「身づからかしこにやは出で給はぬ」

と比較してみれば、右にいう「上接する内容に関する遲疑の念」の意が理解されよう。依頼の内容が結果的には同一であっても、表現の差を無視すべきではない。先の「大系」の訳に

君自身まあ、その隠れ家に出かけて下されませぬか。(出かけて下されよ。)
とある(傍点筆者)のは、その気味を反映させたものであろうか。

以上の検討によって、例文(67)は

「修理大夫が欠員だそうでございますが、(忠保を)それにでも(など)なさって下さいません(でしょう)か」といったような訳を当てるべきものであろうと思う。「でも」「など」としたのは「やは」に認められる遅疑・逡巡の心情をなんとかうつそうとしたものである。

具体的な個々の場面の雰囲気、話し手の姿勢等はそれぞれ異なるのが当然であるし、③型・④型両形の微妙な表現価値の差を端的に表現することは困難であるが、④型の方が、より屈折した、婉曲、間接的な、含蓄に富んだ表現であることは認められようと思う。従って、

(68) さて、この男、しがまに詣でて、二月に行なひけり。かゝるに、この男の局のまへに、女ども立ちさまよひけり。かゝるに、この男、なをしも見で、「など、かくはさまよひたまふ」と言へば、(女)「夜ふけにければ、局もなくてなむ、よるべもなくである」と言へば、(男)「さらば、こゝにやは宿りたまはぬ」と言はせければ、(女)「なにのよきこと」と集まり来て、たゞ、いさ、かなるものを隔ててぞ、この男はをりける。(平中、七。男↓女)

右の傍線部を「大系」では

なぜ、ここに泊まろうとなさらぬのか、さあ、泊まりなさい。(傍点筆者)

と釈しているが、この釈文が、詰問的な調子の表現と解したところから出たものであるならば、それは当たらない。

これは

(イ) 『わづらふ人ありとも、など見えぬ。ここにのみあらで』とさいなみ給はばこそ、うれしうおほえめ』とうらみ給ふに、(夜の寢覚、卷四。内大臣↓寢覚の上)

(ロ) 上、「いとあやしきことかな。など見えさせたまはぬ」ときこえ給ひければ、(夜の寢覚、卷二。母、関白の北の方↓大納言)

(ハ) (男) ものも言ひやらでありければ、女、「などかおとづれぬ」と言ひたり。(平中、三一。女↓男)

(ニ) 「かやうの物は、などかは時々見せさせ給はぬ。いとうるさきことどもには、召しまとはさせ給ひて」と、

怨じ聞こえさせ給へば、(狭衣、卷四。狭衣↓春宮)
などとは違うのである。

例文(68)は「それなら、ここにお泊まりになりませんか」と優しく誘ったものである。『平中物語』から更に一例を掲げておく。

(69) (男) 「おのが身は、いとくちをし、妹もなければ、この琴弾きたまふは、妹背山にやは頼み給はぬ」と、男言へば、琴弾く女、「われも兄なきわびをなむする。よせむかし」と言へば、集りて、言ひすさびて、夜明けにければ、帰りにけり。(平中、二九。男↓女)

右は、「私を兄と頼んでは下さいますまいか」と婉曲に勧誘した言葉である。これも「(なぜ)、兄妹の間がらとして、(わたしを)頼みになさらぬのか、さあ、頼りになさい」といった強い調子の表現ではない。

六

六 1

これまで考察したところを以下に概括する。

中古の物語・日記等の仮名文学作品（和文）における命令・勧誘表現は次のような形式によってなされる。

- | | | | | | |
|---|---------|-------------|---|-----------|--------------|
| ① | ……** | (なほ、しばし心みよ) | ① | ……給へ | (とく帰り給へ) |
| ② | ……む | (われと行かむ) | ② | ……給はむ | (早、出立ち給はむ) |
| ③ | ……むや | (今すこし光見せむや) | ③ | ……給はむや | (見奉り給はむや) |
| ④ | ……やは……ぬ | (重き祿やは賜はらぬ) | ④ | ……やは……給はぬ | (ここにやは宿り給はぬ) |

この形式は、文末に完了の助動詞「ぬ」「つ」が下接する場合も同様であること、既述のとおりである。これらの表現形式を、文末語の類型別に帰納して表示すると次の第2表となる。

この表は一つの整然たる体系を成している。従ってそれは、一定の原理によって統一的に説明し得るものであって、その原理は、上から順に

- (1) 「命令形」 (2) 「推量」 (3) 「推量—疑問」 (4) 「反語……否定」

という文末形式にある。

一 第2表の組織を「命令・勧誘表現の四段型体系」と称する。

二 各形式を①型、②型、③型、④型と称する。

三 この四形式の關係を見るに、先ず①型から③型までは

①型Ⅱ（命令形） → ②型Ⅱ①型（命令形↓未然形） + 「む」 → ③型Ⅱ②型 + 「や」

という一列の構成になっている。實際の用例数からみても、これが命令・勧誘表現の大部分を占め、基本的な形式であることが知られる。④型はこれとは別の構成原理によるもので、助動詞系の形式を欠き、实例も限られている。詳細は注に掲げた別表に譲る。^{*19}

四 各型の表現価値を簡潔に示せば、

①型 命令形による直接的な命令表現

②型 推量形式による婉曲な命令・勧誘表現

③型 推量—疑問（問い）の形式による、一層婉曲な命令・勧誘表現

④型 反語……否定の形式による、最も婉曲・間接的な命令・勧誘表現

となる。即ち、①型が直接的な命令表現であり、以下順をおって、婉曲、間接の度を増し、④型は屈折・迂曲した、最も婉曲・間接的な表現である。従って、命令—相手への働きかけの強さは、婉曲、間接の度が強まるにつれて弱くなる。

ここで、先の第2表のうち「給ふ」「給ひぬ」「給ひつ」系について、「相手への働きかけの強さ」を図示すれば、次の第1図のようになろう。

図について略説する。

第1図

機能	名称	形式	文末語	相手への働きかけの強さ
命令・ 婉曲な命令・ 勧誘	①型	命令形	給ひね 給ひてよ …………… 給へ	
	②型	推量	給ひなむ 給ひてむ …………… 給はむ	
	③型	推量—疑問	給ひなむや 給ひてむや …………… 給はむや	
	④型	反語…否定	やは…給はぬ	

- 1 矢印の長さは、相手（受命者）への働きかけの「強弱」を表わす。ただ、これはもとより図式的なものであり、強弱の差も相対的かつ連続的なものである。
 - 2 下段にいくに従って矢印が短かくなっている。これは下にいくほど婉曲、間接の度が強まる、換言すれば、それだけ相手の自由意志、選択の幅が大きくなることを意味する。
 - 3 ①型から③型までの内部では、横の点線の上下即ち助動詞「ぬ」「つ」の有無によって、判然たる強弱の差が認められる。これは二つの助動詞の「確述」（確かにしておく）の機能による。
- この図は便宜、視覚的に概略を割り切って示したものであり、個々の具体的な様相はいっさい捨象されている。

以上が中古の物語・日記等の仮名文学作品における命令・勧誘表現形式の体系についての概略である。

六 2

なお、前述のような体系の存在は現代語にも認められており、例えば、石黒修『ことば』では「時に応じた話し方」の項で、「いいつける時」即ち命令・勧誘・願望の表現として

お……なさい。

お……になりますか。

お……になりませんか。

お……になります(すで)しょうか。

お……になりませんか。

といった類似形式を挙げ、続いて、これは「長いほどていねいに、うやまったいい方になる。命令する時のほか、たのむ時にも使える。」と指摘する。^{*20}

右はシリーズ「アサヒ相談室」の一冊で、一般の人々を対象に言葉の正しい使い方を説いたものであるが、平易な叙述のなかに言うところは的確、誠に正鵠を得ている。

『敬語と敬語意識』によれば

否定的要素を含む敬語形式(たとえば「ただけませんか」とか「くれんか」など)は、発話全体として、

否定的要素を含まない敬語形式（たとえば「いただけますか」とか「くれ」など）よりはていねいであり、また一般にいていねいと意識されている。

ことが報告されている。^{*21}

更に、最近の『言葉に関する問答集―敬語編―』でも、何かを人に頼むときなどの敬意の程度について、

一般的には、肯定の形よりも否定の形の方がより丁寧であり、言い方が長くなれば敬意の程度も高くなると考えられているようです。

として、「本を取ってください」と「本をお取りください」を例に、それぞれ肯定・否定及び短い形から長い形へと五段階で示している。これは先に石黒の示した五つの形式にほぼ対応する。^{*22}

命令や依頼の場合、肯定・否定の形式及び表現の長・短によって丁寧さや敬意の程度が異なること、右にいうとおりであろう。ただ、筆者はこの他に「推量」の要素も重視すべきであると考ええる。推量の表現が加えられることによって、自ら言い方が長くなり、同時にその婉曲・間接的な表現と相俟って敬意の程度を高めることになると思うからである。この点は夙にロドリゲス、コイヤード等の指摘があった。命令や依頼の場合、これらの要因によって、丁寧さや敬意の程度を異にするいくつかの段階的な表現形式を生じたものと考えられる。この事実は古今通底し、その軌を一にする。先の「四段型体系」はまさしくこの線上にあるものと解されるのである。

七

七 1

先の第2表（四段型体系表）は中古仮名文学作品における命令・勧誘表現形式のうち最も基本的な形式を整理したものである。以下、この表に入れなかったものについて補足、検討する。

前述②型の表現形式（未然形+む）に「こそ」が挿入されて「係結」をとると、次の「こそ……め」の形になる。これは②型の派生形というべきものである。

(70) 「雨降りぬ」といへば、急ぎて車にのるに、「さてこの歌はここにこそよまめ」といへば、「さはれ、道にても」などいひて皆のりぬ。（枕草子、九五。清少納言↓女房）

「五月の御精進のほど」で始まる段から。清少納言たちがほととぎすの声を聞きに洛北に出掛け、途中明順の家に立ち寄った時のことである。「この歌」とはほととぎすの歌の意。「この歌はやはりここでこそ詠みましょう」と言ったものである。なお、この話し手、聞き手がだれかについては別の見解もあるが、解釈には関わらない。

(71) ある人、「北山になむ、なにがし寺といふところに、かしこきおこなひ人侍る。去年の夏も、世におこりて、ひとびと、まじなひわづらひしを、（北山の聖は）やがて、とゞむるたぐひあまた侍りき。し、こらかしつる時は、うたて侍るを、とくこそ心みさせ給はめ」など、きこゆれば、（源氏、若紫。ある人↓源氏）

「とく心みさせ給はむ」が係結をとったものである。「なんと、早くお試しになるがよろしゅうございませ

う」の意。

(72) 御かはらけ度々になりて、御使の少将（仲頼）急ぎ給ふに、（兼雅）「など、かくは急ぎ給ふ。花を見てこそ
帰り給はめ」とて、かはらけ賜ふとて、（うつほ、春日詣。兼雅↓仲頼）

「やはり、花を見てから、お帰りになつたらよろしいでしょう」の意。

(73) 「あな物狂ほし。しのびやかにてこそ出だし給はめ。などかう見苦しう（女房達は）集まりたるぞ」……「あ
なかま、たまへ。いかなる事にも、かかる事は忍びやかにもてなしてこそあらめ。世の音聞きのいみじきを
だに、もて隠し給へ」（狭衣物語、卷三。洞院上↓女房達。洞院上↓今姫の母代）

右は先の例文(16)の前の部分、母代がすっかり逆上して大騒ぎとなるが、洞院の上がその騒ぎを静めようとしてい
る言葉である。それぞれ次のようになろう。

（こういう場合は）やはり男をこつそりと外に出しておやりになるがいい。

こういうことは、そつと穏便にはからうのが一番よろしい。

(74) 乳母「……『おはしまさずは、ややよりはじめて、何を頼みてか仕うまつらむ』とこそ思さめ。つらくあか
らしき父君によりたてまつりて、『身をもいたづらになさむ』とは思すな」と泣く泣く言ふ。（うつほ、菊の宴。
乳母↓真砂子君）

ここには一発話中に意味上、対比的な二文が連続して出て来る。即ち

〈A〉とこそ思さめ。

〈B〉とは思すな。

とあって、一は勸奨であり、一は禁止である。「こそ……め」の解釈の参考になる面白い例であると思う。

(75) つとめて文あり。「夜更けにければ、ここちいとなやましくてなむ。いかにぞ。はやとしみをこそしたまひてめ。この大夫のさもふつ、かに見ゆるかな」などぞあめる。(蜻蛉、中巻。兼家↓作者)

これは精進落しを勧めている言葉であるが、「こそ……てめ」の形式の例は極めて珍しい。これは消息中の例であるが、特に挙げておく。

七 2

さて、ここで「こそ……め」が勧誘・勸奨等の意を表わす理由を確認しておきたい。

そもそも②型は、聞き手の行為の実現を推量の形で述べ、それによって結果として聞き手の行為の実現を求めるものであった。そこに「こそ」が挿入されると、「(このように)こそ、なさって下さい(していただきたい)」と、行為のあり方を感情を込めて強調ながら、その行為の実現を求めることになる。先の例で言えば、「ここにこそ」「とくこそ」「花を見てこそ」「しのびやかにこそ」がその強調の主たる対象である。

なお、この場合聞き手は行為の主体であり、同時にその行為が聞き手の意志によって遂行可能なものでなければならぬこと、先の②型一般の場合と軌を一にする。

「こそ……已然形」の係結をもつすべての例が勧誘・勸奨の意味になるわけではないこと、更に「こそ……め」のすべての例がこの意味になるわけではない理由はここにある。次例によってこの点を確認しようと思う。

(76) 大将殿、「いまは、いざ給へ。部屋にもぞこむる」とのたまへば、(女君)「けしからず。いまはかけてもか、

る事なの給ひそ。忘れざりけりと聞き給はば、思ひつゝ、む事いで来なんかし。人の御代りにはよろしうおぼさ
れにしがなとこそ思はめ」とのたまへば、(大将殿)「さらなる事。女君たちにも君こそは問ひ給はめ」との給
ふ。(落窪、卷四。大将殿道頼↓女君)

ここは道頼がきつい冗談を言つて、女君にとんでもないと強くたしなめられたところであるが、「こそ……め」が
二つ出てくる。道頼の言は「君こそは問ひ給はめ」(あなたこそ言葉をおかけなさるがいい)とあつて勸奨の意であ
る。一方傍点部は要するに女君が「(私は) 継母によく思われたいと存じます」と言つたもので、自身の気持を述べ
たものであるから、命令・勧誘表現にはなり得ない。類似の例でいえば、「われこそ死なめ」(竹取、翁の言)は勸
奨にならぬ道理である。

なお、右の例では「君こそは」と「こそ」と「は」とが重ねられている。より強調した形である。こうした例は
他にもいくつも見られる。

七 3

因みに、この「こそ……め」が時にその場面によって特別な表現価値を持つことがある。数例を挙げる。

(7) (女房達) よろづのことを言ひののしるを、(清少納言)「いで、あなかしがまし。いまは言はじ。寝給ひね」
と言ふ、いらへに、夜居の僧の、「いとわろからむ。夜一夜こそなほのたまはめ」と、にくしと思ひたりし声様
にていひたりしこそ、をかしかりしにそへておどろかれにしか。(枕草子、一二七。夜居の僧↓女房達)
これは、隣室の女房達があまうるさいので、夜居の僧が腹立たしく思つていた訳であらう、「もうお休みなさ

い」と言ったら、「そりゃいけません。ほんとに今晚一晩中そのままおしゃべりなさるがよろしかろう」と「にくしと思ひたりし声様にて」皮肉と嫌味を言ったものである。現代語の「……なさったらいいでしょう」が時にそうした気味合いの表現になるのと等しい。次も『枕草子』の例であるが、これは五十嵐・岡共著『枕草子精講』によつた。異本・異文の詳細については今省略に従う。

(78) (女が) すぐろなること腹立ちて、おなじところにも寝ず、身じくり出づるを、(男は) しのびて引き寄せられど、(女は) わりなく心こはければ、あまりになりて、人も「さは、よかなり」と怨じて、かいくみて臥しぬる後、いと寒きをりなどに、(女は) ただ一重衣ばかりにて、あやにくがりて、おほかたみな人も寝たるに、さすがに起きゐらむあやしくて、夜のふくるままにねたく、起きてぞいぬべかりけるなど思ひ臥したるに奥にも外にもものうち鳴りなどしておそろしければ、(女は) やをらまろび寄りて、衣ひき上ぐるに、(男が) 空寝したるこそいとねたけれ。(男は) 「なほこそこはがり給はめ」などうちいひたるよ。(枕草子、ねたきもの。男↓女)

この部分の要旨を右注釈書をかりて示す。

相愛の仲ながら、ふとつまらない事で腹を立て、男のひきとめる手をふりはらって、共寝の床をぬけ出した揚句、寒さは寒し、夜更けに一人起きてもおられず、奥の暗がりでは何だか妙な薄気味の悪い音のするけは……たまりかねて再びそつともぐり込もうとすると、空寝した男が、「もっと強情をお張り」などつつぶやいているのは残念である。

ここでは「こはがり」の「こは」は「恐」でなく「強」であるとして、「強情をはっていらっしやるがよい」と語

積している。これに従えば、「ほんともっと強情を張っていらつしやればいいでしょうに」ということになる。ここも前例同様、皮肉と嫌味の例である。

(79) うへのきぬ裁ちておこせたり。又おそくもぞ縫ふと(北の方)おぼして、よろづの事おとゞに聞こえて、「行きての給への給へ」と責められて、(中納言)おはして、遣り戸を引きあげ給ふよりの給ふやう、「いなや、このおちくぼの君の、あなたにの給ふ事に従はず、あしかなるはなぞ。親なかんめれば、いかでよろしく思はれにしがなとこそ思はめ。かばかりいそぐにほかの物を縫ひて、こゝのものに手触れざらんや何の心ぞ」とて、「夜のうちに縫ひいださずは子とも見えじ」とのたまへば、女、いらへもせで、つぶつぶと泣きぬ。おとゞ、さ言ひかけて帰り給ひぬ。(落窪、卷一。父中納言↓女君)

「こそ……め」の「め」の意味は一般に「勸奨」とされるものであるが、ここでは強い叱責の口調で表現されている。従って「……思うがよい」ではなくして「思ハナクテハナラヌ」(『落窪物語大成』傍訳)「心がけなければいかん」(『全集』)といったところが適訳であろう。北の方の讒を真に受けた老中納言は立腹しているのであるが、叱責口調での「こそ……め」の例は珍しい。

(80) (道長)まかでたまで、大將殿(頼通)を呼び奉らせ給ひて、「かうかうの事(女二宮降嫁)をこそ仰せられつれば、ともかうも申さで畏まりてまかでぬ。はやさるべき用意して、そのほど、仰事あらん折、参るばかりぞかし」と宣はすれば、大將殿「ともかうも」と宣ひて、たゞ御目に涙ぞ浮びにたるは、上(北の方)をいみじう思ひきこえ給へるに、この事はた逃るべき事にもあらぬが、いみじうおぼさるゝなるべし。殿その御けしき御覧じて、「男は妻は一人のみやは持たる、痴の様や。いま、で子もなかめれば、とてもかうてもたゞ子を設

けんところ思はめ。この辺はさやうにはおはしましなん」と宣はすれば、畏まりてた、せ給ひぬ。(栄花、巻一
二。道長↓頼通)

この道長の言葉は、先ず「こうなったから、そのつもりでいよ」と有無を言わさぬ強い調子で始まり、ついで、「男が妻一人とは馬鹿な」とてもかうてもたゞ(いずれにしてもただもう)子を設けんとこそ思はめ」と続く。「こそ……め」の形式ではあるが、頼通の意向など全く眼中にない、抗い得ない調子である。ほとんど命令に近いというべきか。頼通にはまさに返す言葉もない。

(81) 乳母また来て、よろづのものとりしたため、さるべきものは塗籠に置きなどしつ、(乳母)「京のうちには、一夜ばかりと思ふまじきものぞ。まいて、この井は五六日にもなりぬべかめり。筒など立てむほどまでこそはおはしまさめ。車もありがたきに、たまたま歩かせ給ふも、かくうるさがらせ給ひぬるに」など言ふめれば、君(飛鳥井姫)「このたまひつる所か。さらばなほ忌まじところ思へ。知らぬ所にいかでか、さてはあらむ」とのたまへば、(乳母)「さおほしめさば、常磐殿に渡らせ給へ」と言ふは、故中納言の領せし西山のあたりなりけり。(狭衣、巻一。乳母↓飛鳥井姫君)

ここは乳母が女君を欺き、子の道成とともに女君の筑紫同行を謀る一節から。乳母は土忌み(井戸掘りに関わる物忌)にかこつけて、女君に方違えの他出を強要する。この部分の注釈を次に挙げる。

「こそ……め」は勧誘の気持ちを表すが、ほとんど命令に近い。(「集成」)

「こそ……め」は勧誘の用法だが、かなり押し付けがましい口調である。(「新編全集」)

この後も乳母は長広舌を振り、次第に姫を追い詰めていくが、その言葉は脅しに近い。問題の表現は右の注釈にあるとおり、強制・命令の響きをもとう。

(82) (堀川大殿)「いでや、いと心憂かりける御心かな。……かばかり思ひ紛らはすべき類だになく、一日片時、見きこえぬ程恋しう愛しきものに思ひ聞えたるを(御身は)見る見る、いかなる方に思し立ちて、世を背き捨てんとは出で立ち給ひけるぞ。いとよし。おのれをこそ思し捨てめ。(母上は)女にて、またなく思し紛る、方なくならひ給へる御心に、見給はずなりなん、片時ながらへ給ふべしとや、見え給ふ。……」など、いみじき事どもを、泣く泣く言ひ続け給ふを、(狭衣、卷四。堀川大殿↓狭衣)

右は、父堀川大殿が狭衣の出家を泣いて引き止めている場面。諸注釈書の頭注乃至現代語訳をみるに、ええままよ。あなたは私をお見捨てになるがよい。母宮は女の身で、この上なくあなたを……(「大系」傍点筆者)いや、よろしい、私のことはお見捨てになろうと構わないが、女の身としてそなたひとりを……(「集成」同)まあよろしい。私のことこそ思い棄てなさろうが、女で、あなた以外に……(「新編全集」同)とある。この文に「お見捨てなさるのでしよう。なさるがよい(勝手になさい)」といった、やや放任的な気味合いが感ぜられるのは、「いとよし」とあるのと、「思し捨つ」という動詞の意味のせいであろうか。また、ここは

「おのれをこそ……め、(母上は)女にて……」

という文脈から、逆接的な意味合いを帯びてくる。尤も、これは本来「こそ……已然形」がそこで断止するものではなく、主として逆接的な前提句を形成する機能を持っていたことにもよろう。右の「集成」「新編全集」は逆接的

な訳になっている。(ただし、「こそ……め」を含む文が全く逆接条件を表わす前提句ということになれば、それはここにいう命令・勧誘表現の埒外となる)。

この他、この形式は冗談に用いられたり(源氏、若菜下。源氏↓女三宮)、擲揄に用いられたり(枕草子、二五九、関白殿二月二十一日に。清少納言↓宮司)等、種々あるが指摘にとどめる。

最後に、「こそ……め」が一発話中に連続している例を挙げる。

(83) (出家は)あるまじき事に思し召されて、(帝)「変らぬさまにて見えんところ思し召さめ。今日明日とも知らぬ心地し侍るを。その後、いかにも思し召しなれ。同じさまにて、今一度見えんところ、心強く思し召さめ」など、さまざまきこえさせ給へば、(狭衣、卷二。帝↓女二宮)

病篤く出家しようとする女二宮に対する父帝の哀惜の情が窺われよう。二例は内容的にもほとんど同じ文であり、深い嘆きを感じさせる。

以上、「こそ……め」が特別な表現価値を持つ例を検討した。

それは立腹や不満からくる皮肉・嫌味であり、叱責の例である。あるいは強要・強制の例であり、また、時には泣きながらの放任であり、哀惜の情に基づく要請の例である。

これらは勿論その場における話し手の意図や心情に基づくものであるが、一方、係助詞「こそ」の挿入によるところが大きいものと考えられる。強調、特に極めて主観性の強い感情的な強調を表すとされる「こそ」の挿入によって、話し手の意図や心情が殊更に強く打ち出され、同時に聞き手の行為のあり方が強く規制されることによつ

でもたらされる表現効果であろうと思う。

なお、「こそ……め」が命令形と同様、時に放任的な用法をもつのは、両者の意味的な類縁（命令と勧奨）による。

八

八 1

次は、「べし」について検討する。これは「む」と類似の機能をもつもので、②型に入れる。

松尾捨治郎著『國語法論攷 追補版』では、命令する意を表すのには、六種の方法があるとして、その5に

未来のむ（口語う） 想像のべし を代用する。

としている。^{*23}ここに言う「想像」とは所謂「推量」に相当する。

助動詞「べし」は、こうあるのが当然であるという確信をもって推量するのが本義であるとされる。ところで、右の「代用」の内容を敷衍すれば、次のようになろう。

第二人称の行為を、当然であり、必然であるとする言ひ方は、結果的に見れば、相手の行為を促すことであり、命令することになるが、この語自身は、推量判断を言ったものである。^{*24}

これはまさしく既述②型の「む」の用法と軌を一にする。

次に、『日本文法大辞典』（吉田金彦氏執筆）では「べし」に命令・勧誘の意を認め、「変遷」の項で、

「べし」は漢文訓読文ではよく用いられるが、その使用される意味は命令・可能の場合が多い。命令的な「べ

し」は記録体のものにもよく使われる。

とし、『古語大辞典』（小学館）は、「べし」の⑤に

（多く終止形または「べからず」の形で）勧誘や命令の意を表わす。

として、万葉集、平家物語、今昔物語集の例をあげている。

この両辞典の説明・用例からも窺われるように、「べし」は主として漢文訓読系の文章に用いられるものであつて、中古の仮名文学作品（和文）において「べし」を命令・勧誘に用いた例は実は意外な程少ないのである。例えば、先に①型の項で触れた三作品について見れば、『源氏物語』には用例がなく、『落窪物語』と『夜の寝覚』に各一例が見られるだけである。その他の仮名文学作品には、『うつほ物語』を除いて先ずほとんど見られぬものである。この点は「べし」及び「べし」系統の用例が六百数十例に及び、全用例の三〇%を占める『今昔物語集』などとは同日の論ではない。^{*25}

このように和文において「べし」の命令・勧誘の用例が極めて限られているのは次の理由によるであろう。

- 一 文体的な問題（「べし」は本来、主として漢文訓読系の文章に用いられるものである。）
- 二 和文では②型の「む」がこの言い方を担うから、特殊な場合を除いて「べし」は用いられない。

「べし」の具体例を先に指摘した『落窪物語』と『夜の寝覚』とによって見る。

84 越前守「いと不便なる事。身づからしおき侍らぬ事なりとも、殿にのみなん。しろしめすべし。言はんやさらには、『我かくしおく』など言ひおき侍るに従ひては、たれもたれもみなすこしづつ分かたれ侍るものを」と

取らねば、(落窪、卷四。越前守↓大将道頼)

ここは越前守の父の遺産の配分について、道頼と越前守とが話しあっている場面である。道頼は遺族のためにはとんどすべてを辞退した。右は権勢家で目上の道頼の配慮に恐縮した越前守の畏まり改まった物言いである。直訳すれば

「(殿が所有なさるのが順当です。)お持ちになって下さい」
とでもなろう。

この「しろしめすべし」も命令形を避けた婉曲な言い方なのであるが、それが類似の「しろしめさむ」ではないのは、話し手の恐懼の心情が「べし」という堅い言葉をとらせたということであろうか。

なお、右の文の後に、同じく越前守の大将道頼に対する言葉がある。これは「……給はむ」の形である。

(85) 「帯は、なほ、かくて、人に給はせ、つかはせ給はん」(「帯はやはりこのまま御手許に置いて、人にお与えになるか、(自分で)お使いなさって下さい」)

物語中、越前守から道頼に対する命令・勧誘表現は以上の二例、ともに②型で、遠慮がちな言い方になっている。続いて『夜の寢覚』の例を見る。

(86) 七月一日、いとおどろおどろしきものさとししたり。おぼしおどろきて物問はせ給へば、「中の君の御年あたりて、重くつつしみ給ふべし」となむ、あまたの陰陽師かんがへ申したり。(夜の寢覚、卷一。陰陽師↓太政大臣)

ここは陰陽師が占い、勘え申す言葉であり、公の「勘申」に準ずるものであろう。従って「べし」とあるのが相

応しいということになる。

次は『うつほ物語』から一例を挙げる。

(87) 七日(の産養)になりて、女御の君聞こえ給ふ。(仁寿殿)「夕さは御湯殿すべし。起き給へ。御髪かき解かむ」と聞こえ給へば、起き給へり。(うつほ、蔵開^上)。女御の君↓女一宮)

これは仁寿殿の女御(母君)の女一宮に対する言葉で、「夕方は御湯浴をなさるとよろしいでしょう」あるいは「御湯をつかいましたよ」と勧奨しているのである。話し手が女性の、珍しい例と言える。いわゆるお七夜に際し、改まった言葉遣をしたものであろうか。

八 2

続いて「べし」の派生形式の例を挙げる。

先ず、係結による「こそ……べけれ」の形式のもの。

(88) 「限りなき(薫の)御心の程をば、今しもこそ、見たてまつり、知らせ給ふさまをも(薫に)見えたてまつらせ給ふべけれ」など(中君に)きこゆれど、(源氏、早蕨。女房↓中君) 五・二九

(89) 「ゆかり離れずあなづらはしき人をば、ただ御簾のうちにこそ入れさせ給ふべけれ。いとうとうとしく顕証なる心地する」とのたまへば、(夜の寢覚、卷一。中納言↓中君の女房)

これらは「(なさる)べきでございましょう」、「(なさるが)よろしいでしょう」などと訳すべきものである。これは、先の「こそ……め」の場合と同様の用法である。用例は少数に限られる。

『國語法論攷 追補版』では「命令文の係結」の項で、「べし」「べからず」「む」などを用いて命令の意を表すことがありとして「こそ……め」他の例文を挙げ、説明している。ここには関連する部分のみを引く。

降りさせ給ふ時は前よりこそ降りさせ給ふべけれ。(平家物語)

平家の文例をば天草本には「下りさせらるゝ時は前からこそおりさせられい。」と口訳して居る。

此等は命令形を用ゐた者とは違つて、元来未来とか義務とかの意義を有するものを、命令の意に転用したのである。その為、命令形を用ゐたものとは語勢に緩急の差がある。

右は、時代も文体も異なるが、この用法を考察する上で大いに参考にならうと思う。

次は、「なむ……べき」の例を見る。

⑨ 「更に、えわけさせ給ふまじき蓬の露けさになむ侍る。露すこし払はせてなむ、入らせ給ふべき」ときこゆれば、(源氏、蓬生。惟光↓源氏)

直訳すれば「露をすこし払わせてから、お入りあそばすのがよろしゅうございましょう」となろう。勸奨の構造は「こそ……べけれ」と等しい。ただし用例はごく限られている。

右の「こそ……べけれ」「なむ……べき」は先の「べし」とともに②型に含める。

「べし」系統では右の他「べきなり」という表現が僅かながら見られる。

⑩ 大徳呼びて、(北の方)「かうかうして(局)取られぬ。いみじき恥にこそあれ。又つぼねありぬべしや」と

言へば、大徳、「さらにいまはいづこのかあらん。入りゐたるをだに殿ばらのきみたちはおしるさせ給ふに、遅く下りさせ給へるがましてあしきなり。いかゞせん。御車ながら明かさせ給ふべきなり。……」など言ひていぬれば、かひなし。(落窪、巻二。大徳↓中納言の北の方)

『落窪物語』の例である。清水詣の際、中将(男君)の一行は中納言が予約していた局を先手を打って占領してしまふ。ここは局を求める北の方に対する大徳の言葉である。

右の「(せ給ふ) べきなり」は『落窪物語』で唯一の用例である。話し手は男性、しかも僧侶であることに注意すべきであろう。相手は女性であるが、大徳らしい堅い言葉遣をしたものである。

② 姫君に、「聞えさせし人参うで来たり。まろおぼし召したるやうにはな疎み給ひそ。他人はあいなく思ふやうもありなん。思ひぐまありて、心くるしう物せさせ給ふべきなり」とて、返す返す教へしるべして、呼び出で給ふ。(浜松中納言、巻四。中納言↓姫君)

傍線部は「相手を気の毒とお思いあそばすのがよいのです」と繰り返し「教へしるべ」(教導)したものであり、この語の改まった調子が知られようと思う。

この「べきなり」は中古の仮名文学作品(和文)では用例が限られていて、右の他『源氏物語』その他に少数例を見出すに過ぎない。この形式は命令形ではないが、「ソウアルべき(当然)十なり(デアル)」と表明するところから命令・勧誘の意を表わすものとする。これは①型に準ずる。

既述の「つ」「ぬ」「む」及び「べし」以外の助動詞による命令・勧誘表現としては、使役の「す・さす・しむ」、尊敬または受身の「る・らる」、完了の「たり・り」等の命令形による例が見られる。もともと作品によつて差があり、例えば完了の「り」の命令形は「給へれ」の形で『落窪物語』『うつほ物語』に比較的多く用いられるが、使役の「しむ」の命令形は『うつほ物語』の一例しか用例がない、といった偏りがある。ここでは簡単に一、二の例を挙げるにとどめる。

- (93) 「尼君のとぶらひに、ものせんついでに、垣間見せさせよ」との給ひけり。(源氏、夕顔・源氏↓惟光)
- (94) 婿の少将の君のうへのはかま縫はせにおこせ給ふとて、「これはいつよりもよく縫はれよ。祿にきぬ着せたてまつらん」とのたまへるを聞くに、いみじきことかぎりなし。(落窪、巻一。北の方↓女君)
- (95) 少将、「しばしゐたれ。いかにぞや。行きやせんとする」「かちからまかりて、言ひなぐさめ侍らん」と申せば、君「さらばわれと行かん」との給ふ。(落窪、巻一。少将↓帯刀)
- (96) 「しばし入りて臥し給へれ」とて、責めて引き入れ給ひて、よろづに言ひなぐさめ給ふ。(落窪、巻一。少将↓女君)

九 2

次に助詞が下接する例を挙げる。

(97) 「国王の仰ごとを背かば、はや殺し給ひてよかし」といふ。(竹取。かぐや姫↓内侍)

(98) 「なほもて来や。所に従ひてこそ」とてめし寄せて見給へば、(源氏、夕顔。源氏↓預の子)

(99) 「今宵は出で侍りぬるぞ。時々は、宮の御前に御殿籠れよ。明日は疾く参らん」と申し給ふを、(狭衣、卷三。狭衣↓若宮)

(100) うへ、「……山に七日ばかり籠り給ひて、心のどかに護身もせさせ給へかしな」と類なう、いたはしと思しつゝ、の給はするを、(狭衣、卷三。母堀川上↓狭衣)

これらは①型に下接した例である。「かし」の例が最も多く、中には「かしーな」と二つの助詞が重なった例もある。

次は、②型に助詞が下接した稀な例である。

(101) 「さも侍ることなり。しばし渡らせ給はんかし。……」とこの君うけひき給へば、(夜の寢覚、卷四。兄中納言↓寢覚の上)

(102) 「……山深くとも、又もかならず立ち寄らせ給ひなんかし」いへば、すゞろにゐ暮らさむも怪しかるべければ、帰りなんとす。(源氏、夢の浮橋。妹尼↓小君)

(103) 「君は、いざ給へ。(祭を) もろともに見むよ」とて、(源氏、葵。源氏↓紫上)

004 「今宵ばかりは、ことわりとゆるし給ひてんな。……」と思ひ乱れ給へる御心のうち、苦しげなり。(源氏、若菜上。源氏↓紫上)

以上、いずれも各型の派生的・副次的な表現である。なお、各助詞の表現価値については別に述べる。

一〇

これまで述べたところを概観するために、『竹取物語』以下の作品について、各表現形式の使用状況を表示したのが次の第3表である。

初期の『竹取物語』から『篁物語』までの五作品中、『竹取物語』を除く四作品は歌物語であるが、歌物語には極度に会話文が少なく、^{*26}それに応じて命令・勧誘表現も少ない(これらの作品における会話文数と命令・勧誘表現数との比率は大凡四対一である)。これら五作品の命令・勧誘表現はすべて用例数五〇以下で、特に『篁物語』は九例、『伊勢物語』は一一例である(各作品の命令・勧誘表現数については、注19の表を参照して戴きたい)。いずれも小さな作品であり、また会話文(命令・勧誘表現)の形式もごく短小、単純であることもあって、②型・③型・④型の用例はごく限られている。

この中であって、『竹取物語』の「こそ……め」「給ひてむや」「やは……給はぬ」の用例の存在は注意すべきものである。なぜなら、ここには、①型から④型までの実例が既に見られるからである。

一方用例数の多い『うつほ物語』『源氏物語』ではほぼ全用例を見、『落窪物語』もそれに近い。『夜の寝覚』以下の作品では、②型・③型・④型の用例は『源氏物語』等に比し減少するが、なお各用例を見る。(小論は通時的研究

第3表

機能	形式	名称	作品															
			文末語	竹取	伊勢	大和	平仲	篁	蜻蛉	うつほ	落窪	枕草子	源氏	夜の寝覚	浜松	狭衣	讃岐典侍	
命令形	命令	①型	動詞命令形	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
			ね	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
			てよ	○			○			○	○	○	○	○	○	○	○	
			給へ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
			給ひね	○		○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	
			給ひてよ	○		○				○			○	○		○		
			助詞	かし	○			○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
				よ			○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	
				や				○		○	○			○	○		○	○
			婉曲な命令・勧誘	推量	②型	む		○		○		○	○	○	○		○	
なむ									○	○	○	○			○	○		
てむ						○				○	○		○		○			
給はむ										○	○			○				
給ひなむ									○				○		○			
給ひてむ						○					○		○					
こそ……め	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
べし系									○	○		○	○	○				
推量・疑問	③型	むや								○			○			○		
		なむや								○	○		○			○		
		てむや				○				○	○		○	○				
		給はむや							○	○			○	○				
		給ひなむや								○			○		○	○		
		給ひてむや	○						○			○			○			
反語・否定	④型	やは……ぬ							○	○			○					
		やは……給はぬ	○			○			○	○			○	○				

- 1 「○」はその形式の用例があることを示す。
- 2 従って、これは用例の多寡は表わしていない。実際には①型、特に「給へ」によるものが最も多い。
- 3 助詞下接の形式は比較的用例の多い①型のみ表示した。
- 4 『大和物語』の「付載説話」は除く。
- 5 『竹取物語』の「ね」は「具して出でおはせーね」の一例のみであり、「おはす」の活用の種類をどう考えるかで、この欄は動く。

を志すものではないが、表に関して一言する。)

既に第2表で確認したところであるが、更に右の事実も、中古の仮名文学作品における「命令・勧誘表現の四段型体系」の存在の確かさを示すものである。

おわりに

以上、中古の仮名文学作品における命令・勧誘表現を考察し、右のような結果を得た。ここで志したところは、まずもって右表現形式の体系を確認することであった。体系を認識してはじめて個々の用例も一定の原理に基づき、統一的に、誤りなく説明し得るであろう。例えば『うつほ物語』の

春宮「対面する人には、つねに物するは。かうなども聞え給はずや」大宮「うけ給はる時もあれど、さるべきども侍らざめれば、心ときめきに思ひ侍りつるに」(菊の宴)

右の春宮の言葉を「大系」(二・四八)では

会う人毎にいつでも、あて宮の噂ですよ。こういうわけだと打明けて下さいませんか。(傍点筆者)

と頭注しているが、ここを命令(依頼)表現と解することは出来ない。この「……給はずや」という形式を命令・勧誘表現に用いた例は『うつほ物語』はもとより、少なくともここで対象とした作品中にはないからである。また同じく「大系」では、

「数ならぬ身の淵瀬をば思ひ給はずや」とのみ聞え給ふ。(国譲中。三・一七六)

を「給へ」は「給は」の誤ではなからうか、として「数の中にも入らない私の浮沈を御同情下さいますか」と解し

ているが、この校訂の問題及びそれに基づく解釈も当らない。右二例の解は詳しくは既発表の小論に譲るが、体系の認識によって、本文校訂や解釈にも寄与し得るのである。

同じく『うつほ物語』でいえば、次のような例が見られる。

「さればこそ、さは聞こゆれ。かく憂き身なれば、今更によろしきこともあらじ。……」といへば、出でて聞こゆ。(俊蔭)

右を最近の二種の注釈書で、それぞれ「それならそのように、申し上げなさい」「それではそのようにご返事申しなさい」というふう^{*28}に現代語訳しているが、これを命令の意に解釈し得ないことはほとんど自明に類するであろう。また、

「人は一人なれど、かやうにこそ養ひ立てたまへ」(蔵開上)

ここも「あんなふう^{*29}に立派なお子をお育てになられませ」とする。

いずれも「こそ……已然形」の係結の文を命令の意に誤ったものである。もっとも、これらは命令・勧誘表現についての知識(あえて体系の認識とは言わぬ)の欠如というよりも、むしろ初歩的な文語文法の問題というべきであらうが。

第二の目標は、体系内における各形式の表現価値を明らかにすることであった。命令・勧誘表現形式が複雑なことは、おそらく時代を限らぬであろうが、本稿は中古の仮名文学作品における、その複雑な命令・勧誘表現を体系的に把握し、その上にたつて、各形式の多様な表現価値の究明を志した。例文が多くなったのはそのためである。既に第六項においてまとめを行っており、ここで繰り返すことはしない。

なお、本稿は次の旧稿を基にしている。

「中古仮名文における命令・勧誘表現体系」(『国語国文』第四四卷第三号、一九七五年)

四段型体系の認識、各形式の表現価値の解釈等、すべてこの旧稿で述べたとおりである。本稿は用例を大幅に増やし、分析を詳しくしたものであって、基本的な考えは全く変わらない。

注

- *1 「命令・勧誘表現研究のために」(札幌大学文化学部紀要「比較文化論叢」2。一九九八年七月)
- *2 龜井 孝『概説文語文法』一六五頁。
- *3 拙稿「助動詞『つ』『ぬ』の確定的用法」(『王朝』第六冊。昭和四八年四月、王朝文学協会)
- *4 『活語指南 上』「義門研究資料集成上巻」四二六頁、「希求言」の項。この語に「コヒネガヒモトムル」と傍注がある)
- *5 ただし、竹取物語、伊勢物語他の歌物語及び土左日記他の日記文学作品においては、動詞と「給ふ」類との比率は逆転する。
- *6 『源氏物語』の命令・勧誘表現再論(五)(札幌大学文化学部紀要「比較文化論叢」9。二〇〇二年三月。一〇七頁他)
- *7 *3に同じ。
- *8 この部分を「言おうよ」と勧誘の意に解するものに、「大系」・明治「校注古典叢書」頭注等がある。ただし、別に次のような解釈がみられる。
「全集」は「……と私の邸にいる者に言うつもりです」とし、「新大系」は同じく「……と言うつもりだよ」とする。また柿本奨『落窪物語注釈』は「……と言おうと思っっていますよ」とする。

ここは、本文で既述の如く(1)「言おう」と勧誘したものととるか、それとも右の如く(2)「言おうと思う」「言うつもりです」と話し手自身の気持を表明したものととるか、の相違であるが、(2)は採れない。(2)はあるいは「いかゞおぼす」という下の語句に引きずられた解であろうか。ここは「いはむよ」であつて「いはむと思ふ」ではない。あるいはまた(2)は次の「日本古典全書」や『落窪物語大成』の解に影響されたものであるうか。「日本古典全書」は「……といはむは、いかが思ふ」の本文について、「……といはうと思ふが(あなたは) どう思はれますか」とする。これは遡つて『落窪物語大成』も同文、ほぼ同解釈。この「言はんよ」が勧誘の意を表わすこと、例文②等に照らしても何ら問題はなく、(1)の解をとるべきである。

* 9 土井忠生訳、三省堂刊、六一頁。

* 10 大塚高信訳、坂口書店刊、二九頁。

* 11 この歌詞の解については次に負うところが大きい。

柳田國男「蝸牛考」(筑摩版「柳田國男全集5」)

仲井幸二郎「類型の詞章」(日本語講座第二卷「ことばの遊びと芸術」)

町田嘉章・浅野建二編『わらべうた―日本の伝承童謡―』(岩波文庫)

松永伍一『日本の子守唄』(角川文庫)

* 12 『あゆひ抄』巻五。勉誠社文庫による。今表記を一部改めた。

* 13 ここでいう「疑問」は広義のそれである。「疑問」を「疑い」と「問い」とに分ける立場によれば、この「や」の意味は「問い」である。これは岡崎正継「疑・問の表現―今昔物語集のヤ・カ―」(『野州国文学』第二号。後『国語助詞論攷』所収)の見解に従う。

* 14 この紀伊守の言葉の解釈、その語法的な説明は懸案のものであった。「大系」は頭注で

青表紙本はすべて「宣ひみん」とあるが、伝阿仏尼筆本に「宣ひてん」とあるのが、原本の正しい姿と
思う故に今改めた。

と説いている。「宣ひみん」では「語法不審」(『全集』)なので、古くからいろいろな説が出ている。佐伯梅友氏は「姉なる人にのたまひみむ」(『国語国文』第一三卷第三号)で、それまでの説を検討し、結局、宣長や広

道の説く、源氏の仰を伝えるのだから自分の行為に敬語をつけたのだ、とする説をとる。その後、有坂秀世氏「祝詞宣命の訓義に関する考証」(『国語音韻史の研究増補新版』所収)の

これは源氏の仰せ言を己の家族の者に伝へるのであるから、「の玉ひみん」即ち「申し聞かせて見ませう」といふ言ひ方を用ゐることに不思議はない。

という見解をうけた杉崎一雄氏が、これは「聞き手尊敬語としての、尊敬語の特殊用法」であり、「いわばかしこまりあらたまつた言い方の一つと考えられるものである」とされている(『源氏物語』の敬語法)『源氏物語講座』第七巻。後、『平安時代敬語法の研究』「かしこまりの語法」とその周辺』に一章を設けて詳説)。

なお、ここを「宣へみむ」「宣へ侍らん」と下二段に解こうとする考えも、『有朋堂文庫』『源氏物語講話』以来強い。最近は『のたまひみむ』で一語。仰せ言を伝えて、様子をみよふの意か(『新編全集』)などという注まで出てきた。

ここで諸説を検討する余裕はないが、右のうちでは杉崎氏の説にひかれる。ただ「のたまふ」の「かしこまり」の用法は、『うつほ物語』には用例が多く見られるが、『源氏物語』にはこの一例だけであり、その点が問題となる。

結局ここは、「大系」の校注に従いたいと思う。紀伊守の言葉を聞いた源氏が「胸つぶれて思」すのは、(紀の守から「直接、空蟬に消息を」など言われたので)源氏は胸がどきんとしたが。(「大系」頭注、傍点筆者)

という気持であろうから。

* 15 要するに「の給ひてよ」を「の給ひてむ」(おっしゃっていただきましょう)と婉曲に表現したものと解する。同書、第二部「記録語研究の諸問題」三九五頁。

* 16 「や」の意味について触れたもので管見に入るもの。いずれも部分的なものに過ぎないが、論文名等を記しておく。

「疑問の意味のない終助詞」とするもの

古川泰雄『む』の研究(學燈社「國文學」第四卷第二号)

「感動・感嘆あるいは詠嘆」とするもの

- 北山谿太『源氏物語の新研究 桐壺編』（武蔵野書院）他
 鈴木弘道「古文読解のための文法指導」（學燈社「國文學」第四卷第二号）他
 「終助詞、確かめ」とするもの
 阪倉篤義「中古語法の特質と解釈上の問題点」（學燈社「國文學」第一四卷第七号）
 岡崎正継著『国語助詞論攷』第三章。
 * 17 「文学・語学」第二三三号。
 * 18 作品別型別用例数の表
 * 19 昭和二八年七月、朝日新聞社刊、一四九頁。ここには各形式の核心的な部分のみ引用した。
 * 20 「国立国語研究所報告11」三七六頁、昭和三二年。
 * 21 文化庁「新『ことば』シリーズ2」二六頁、平成七年。
 * 22 白帝社刊、八一九頁。
 * 23 時枝誠記著『日本文法文語篇』一八九頁、「べし」の用法の項。
 * 24 『今昔物語集』の「べし」については、次の拙論において詳述した。
 * 25 「『今昔物語集』の命令・勧誘表現 序章―用例の採否・分類の基準と用例一覧表等―」（『史料と研究』第二六号、平成九年六月）
 * 26 阪倉篤義『文章と表現』第一章第五節「地の文と会話文」。
 * 27 「『給ふ』か『給ふる』か―日本古典文学大系「宇津保物語」の校注について―」（『人文論究』第三三三号、昭和四八年三月）
 * 28 前者は『宇津保物語・俊蔭 全訳注』「講談社学術文庫」（二六九頁）の訳、後者は『うつほ物語』「新編全集1」（九四頁）の訳である。
 * 29 『うつほ物語』「新編全集2」（四一四頁）の訳。

注19 作品別型別用例数

作 品 \ 型	① 型	② 型	③ 型	④ 型	計
竹 取 物 語	37 (86.0)	3 (7.0)	1 (2.3)	2 (4.7)	43 (100)
伊 勢 物 語	8 (72.7)	3 (27.3)	0 (0)	0 (0)	11 (100)
大 和 物 語	47 (94.0)	2 (4.0)	1 (2.0)	0 (0)	50 (100)
平 中 物 語	40 (83.3)	6 (12.5)	0 (0)	2 (4.2)	48 (100)
篁 物 語	7 (77.8)	2 (22.2)	0 (0)	0 (0)	9 (100)
落 窪 物 語	292 (93.3)	19 (6.1)	2 (0.6)	0 (0)	313 (100)
源 氏 物 語	570 (88.7)	39 (6.1)	28 (4.3)	5 (0.8)	642 (100)
堤 中 納 言 物 語	45 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	45 (100)
夜 の 寝 覚	130 (90.3)	9 (6.2)	4 (2.8)	1 (0.7)	144 (100)
土 佐 日 記	8 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (100)
蜻 蛉 日 記	74 (83.2)	10 (11.2)	2 (2.2)	3 (3.4)	89 (100)
和 泉 式 部 日 記	17 (81.0)	3 (14.3)	1 (4.7)	0 (0)	21 (100)
紫 式 部 日 記	8 (88.9)	1 (11.1)	0 (0)	0 (0)	9 (100)
更 級 日 記	24 (96.0)	1 (4.0)	0 (0)	0 (0)	25 (100)
讃 岐 典 侍 日 記	70 (92.1)	3 (3.95)	3 (3.95)	0 (0)	76 (100)
計 (平均)	1377 (89.8)	101 (6.6)	42 (2.7)	13 (0.9)	1533 (100)

- ①型が大多数を占める。特に命令・勧誘表現の用例数40以上の作品ではいずれも80%以上、平均ほとんど90%に及ぶ。中には『堤中納言物語』の如くすべて①型の例も見られる。
①型の比率が80%以下の作品は用例数の少ない『伊勢物語』と『篁物語』との2作品のみである。
- 全体として②型・③型と漸次比率を減じ、④型は平均1%に満たず、表示した16作品中10作品には用例がない。
- 以上によって、①型が命令・勧誘表現の最も基本的な形式であることが数量的にも確認されよう。